

〈論文〉

プラトンの『パイドロス』における魂と神（神霊）の関係の考察

—— プラトンによるソフィストあるいは弁論術の批判 ——

A Study on the relationship of Holy Spirit (or Dimon) to Soul in Platon's 『Φαῖδρος』

—— His Criticism against Sophists and Rhetoric Arts ——

久保田 義 弘

要旨

本稿では、プラトンの対話編『パイドロス』においてソクラテス（すなわちプラトン）によって繰りひろげられたエロス論の特質について考察する。すなわち、パイドロスが朗読した弁論家リュシアスのエロス論と対比してソクラテス（すなわちプラトン）のエロス論を検討し、両者の違いも考察する。その対比を通して、ソクラテス（プラトン）のエロス論の特質を鮮明にされる。対話においてソクラテスは二つのエロス論を提示しているが、それぞれは、まったく異なった二つの立場からのエロス論である。その一つは、リュシアスと同様に恋する人ではなく、恋してはいない人を愛するエロス論であり、他は、恋している人の方を愛するエロス論であった。

本稿では、現世の美しい人を目にし、そこから美の真実在から現実（この世）の美を認識する認識論としてのイディア説が示される。その認識論は、プラトンの対話編『饗宴』で検討した認識論の拡張、深化あるいはその延長線上にあるものであるが、プラトンは、神（あるいはデーモン）の存在を強調し、真実在の認識には神あるいはデーモンの働きを欠くことができないと主張している。プラトンのように、ある実体を認識するには、神の存在を持ち出す必要があるのかどうかは、疑問であると考えられている。そのため、今日の科学の時代において、これがプラトンの認識論を積極的に評価されない一面である。

本稿では、また、弁論術についても紹介される。その真実在を伝え教える方法として、プラトン自身によって開発されたディアレクティケー（哲学的問答法）を説明する。その方法と、プラトンが活躍していた当時の弁論術（言論の技術）あるいはソフィストの詭弁術との違いを示す。ソフィストは、事柄の真実在ではなく、世間の人達に受け入れられること、あるいは受け入れられるであろうと思われることが真実であると考え、その事柄を理路整然と語るひとが知恵者であると言うが、プラトンはその立場には与せず、彼の言論の術を展開する。その言論の術は、彼のイディア説に裏打ちされた言論の術（弁論術）である。

キーワード：イデア説，真実在，影像，ソフィスト，弁論術，ディアレクティケー（哲学的問答法）；総合と分割，エロス

## はじめに

本稿では、古代ギリシヤの哲学者プラトン（Πλάτων, Plátōn）（前 427 年-前 347 年）<sup>1</sup> を取り上げるが、彼は、イデア説（イデア論）や想起説を提唱した哲学者、ソクラテスを対話者の一人として数多くの対話編を著した思想家・文筆家（詩人）、講師料などの金銭の見返りとして青年に人生の処世術（生きる技術）を講義したソフィスト達の教義に反論をもって対抗した問答術の達人、政治家になる希望あるいは夢を抱いて政治・国家について考察した国家論者、またソクラテスに心から信頼し敬愛したソクラテスの愛弟子であった。本稿では、ソフィストに与することを拒否し続けた思想家・哲学者であったプラトンの対話編『パイドロス—美について—』において、魂と神の関係、ならびに彼のソフィストあるいは弁論術（言論の技術）への批判ならびに彼自身の弁論術（言論の技術）を彼の言葉の引用によって（その著作からの引用を通して）明らかにする。

『パイドロス—美について—』は、プラトンの対話編 35 編の中の一つであり、彼の中期作品（対話編）の一つであるが、プラトンが対話形式によって彼の作品を仕上げているのは、彼が書かれた言葉には、真実在ではなく、その影像のみ捉えられるに過ぎないと確信していたからである。すなわち、プラトンは、問いによって魂に迫り、それへの返答・再返答（再提案）によって、魂から真の実在の確実が得られると信じていた<sup>2</sup> からである。この『パイドロス—美について—』は、彼の対話編『国家』の執筆後の対話編であると考えられている。プラトンは、彼の対話編『国家』において、彼の認識論である‘イデア論’を確立させていたと思われるが、『パイドロス—美について—』はその認識論を基盤にして組み立てられて

---

<sup>1</sup> プラトン著作の翻訳者であった藤原令夫氏は、その『プラトンの哲学』において、「本書で「プラトンの哲学」というのは、もっぱら、この現存する「プラトン著作集」から知られることのできる哲学思想のことであると言っている。アリストテレス以来、著作集（対話編）に見当たらない—そしてしばしば相容れない—説教や情報を「プラトンの哲学」として伝える古代の資料がいろいろあるけれども（「書かれざる教説」「イデア=数の説」またイデア論に形成過程やソクラテスとの違いについての一方的な記述、など）、疑問点の多いそれら二次資料の情報を無理に取り入れて、プラトン自身の書き残した哲学思想をゆがめる必要はまったくない」と述べている（『プラトンの哲学』3 ページ）。本稿も藤原氏と同様に、プラトン自身に言論の技術等について訊ねることを狙いとしている。実際、対話形式での書き残されているプラトンの解釈には多様であり、時代世相にもその解釈は影響される。

<sup>2</sup> プラトンが書き言葉に真の実在がないであろうと考えていた点については、『パイドロス』275D から 276B（136 ページ 2 から 138 ページ 7 行目）を参照。また、ブチャー著（田中秀央・和辻哲郎・寿岳文章共訳）『ギリシヤ精神の様相』5 書かれた言葉と話された言葉（157 ページ 1 から 178 ページ 3 行目）を参照。

いるが、その執筆年代は、前370年頃であろう<sup>3</sup>とされている。

またこの対話編では、リュシ阿斯という弁論家のエロス論がパイドロスによって朗読され、その論との対比を試みる形式で、ソクラテスがまったく異なった二つの立場からのエロス論を展開しているが、その一つは、リュシ阿斯と同様に恋する人ではなく恋してはいない人を愛するエロスであり、他は、恋している人の方を愛するエロス論であった。現世の美しい人を目にし、そこから美の真実在を知り、美を認識する方法として、プラトン自身によって明らかにされたディアレクティケー（哲学的問答法）を適用し、プラトンが活躍していた当時の弁論術（言論の技術）あるいはソフィストの詭弁術を批判的に考察する。

プラトンは、ソクラテスを主役して、対話形式で話し・議論を繰り返すひろげるために、プラトン自身の見解が何処にあるのかを明確にしていないうえ、プラトンについての見解の解釈については、読み手によって、様々で有り得る。本稿は、4つの節から構成される。第1節では、プラトン哲学の基本である魂に焦点をあて、『パイドロス』で取りあげ言及されている魂の特性について読み解く。その第1項では、魂の不死性について検討し、第2項では、魂の形状について見る。第3項では、生けるものの不死性と死滅性の関係を見るが、肉体に魂が入り込むことによって、その不死性が与えられ、魂が抜けると死滅することを見る。その第4項では、天界での神々ならびになぜ魂が大地に落ちるのか説明し、現世における魂の階層性に関するプラトンの見解を紹介する。第2節の第1項では、狂気と神憑りならびに美の真実在についてのプラトンの考えを紹介する。その第2項では、魂と真実在の関係を示し、その上でこの世における愛の情念を確認する。その第3項では、愛することは神に倣うことであることを示す。第3節では、話法と作文法すなわち弁論術を検討し、プラトンの哲学的問答法とはどのような言論の技術であるかを紹介する。その第1項では話法について考察し、第2項では、言論術の構築が展開され、第3項では、プラトンの言論の技術、すなわち総合と分割による言論の技術を示す。第4項では、弁論家になるための条件がしめされ、第4節では、ものを書くことの意味と書かれた言葉に関するプラトンの見解を考察し、その第1項で、プラトンの問いとエジプトの神アンモンの予言について紹介し、第2項では、書き言葉についてのプラトンの見解を概観し、その第3項にて、哲学者の素質について確認し、ソフィストにはその素質が完備されていないというプラトンの見解を紹介する。

デカルトは、蜜蝋を例にして、蜜蝋とは何かを認識するとき、味や香りや形や大きさなどを感覚で捉えるが、時間と共に味が変わり、香りが変化し、形が固形から液体に変わり、その触った感覚も変化するが、このとき変化後の蜜蝋は、その変化前と同じように蜜蝋と言わ

<sup>3</sup> 上掲書『プラトンの哲学』（56ページ）ならびに（久保勉訳）『パイドロス』解説（191ページ7から14行目）参照。

れないのであろうか。否、蜜蠟といわれるのである。このことから、デカルトは「この蜜蠟の知覚（もしくはそれを知覚するはたらき）は、視覚でも触覚でも想像でもなく、たとえ以前にはそう思われたにしても決してそういうものであったのではなく、ただ精神のみの洞察である」<sup>4</sup>と示している。その蜜蠟の外形的な形が蜜蠟を決めるのではなく、その香りや味などから蜜蠟を決めるのでもない。円形であっても四角形であっても、蜜の味や香りが失せていても蜜蠟には変わりはない。固形であっても液体状であっても蜜蠟には変わりがなく、固形の蜜蠟も液体の蜜蠟も蜜蠟である。多様の外形の蜜蠟を想像することはできないであろうから、デカルトは、想像力によって蜜蠟を認識するのではなく、精神、(理性、悟性)によって蜜蠟を認識することになると考えるようになった。

デカルトの観念は、プラトンのイデアそのものであると思われるが、ただ、デカルトは、プラトンとは違って、思惟する人間（自分自身）の存在を明証的にし、その人間（自分自身）が認識の主体であることを示した点において、プラトンの神話的な認識論から人間主体の認識論へと、プラトンのイデア説を拡張したと思われる。またデカルトもプラトンと同様に神の存在を確信している。疑う自身と神の存在の肯定がデカルトの認識論の基本であるが、プラトンは、崇敬するソクラテスと神の存在を肯定する認識論（イデア説）を唱えている。本稿では、プラトンからデカルトへの発展については触れることはないが、本稿では、プラトンの認識論と弁論術を検討する。

## 第1節 魂の特性

プラトンは、魂はすべて不死なものである<sup>5</sup>、と言う。魂とは、われわれの理性（思慮）に当たる部分（理知的部分）、われわれの怒りや欲びなどの感情に当たる部分（気概の部分）、そして食欲や性欲などの欲望に当たる部分（欲望的部分）から構成されると考えられる。これを魂三分説と呼ぶ。プラトンの『国家』<sup>6</sup>において、この3つの部分についての関係が説かれている。「魂がそれによって、<sup>ことわり</sup>理を知るところのものは、魂のなかの〈理知的部分〉と呼ばれるべきであり、他方、魂がそれによって恋し、飢え、渴き、その他もろもろの欲望を感じて興奮するところのものは、魂の非理知的な〈欲望的部分〉であり、さまざまな充足と快楽の親しい仲間であると呼ばれるのがふさわしい」<sup>7</sup>とプラトンは書いている。魂の第三の要

<sup>4</sup> デカルト著（梶田啓三郎訳）『省察』省察二（44ページ6から8行目）。ここでデカルトは、一般的な蜜蠟ではなく、今見ている蜜蠟を問題にしている。デカルトは、思惟するものとは、精神、すなわち靈魂、すなわち悟性、すなわち理性であると言う（前掲書『省察』省察二（38ページ15から16行目））。

<sup>5</sup> プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』（245D（56ページ5行目））。

<sup>6</sup> プラトン著（藤沢令夫訳）『国家（上）』440Eから441B（第4巻第16章、358ページ16から359ページ16行目）参照。

<sup>7</sup> 上掲書『国家（上）』439D（第4巻第14章、355ページ7から11行目）。

素としての気概については、プラトンは「気概、すなわち、われわれがそれによって憤慨するところのもの」<sup>8</sup>として規定している。欲望と理性（理知）と気概の関係について、プラトンは、「欲望が理知に反して人を強制するとき、その人は自分自身を罵り、自分の内にあって強制しているものに対して憤慨し、そして、あたかも二つの党派が抗争している場合におけるように、そのような人の〈気概〉は、〈理性〉の味方となって戦うのではないか」<sup>9</sup>と書いている。プラトンの魂論は、三分割されて構成されるが、この構成で三分割に対応させている点に特徴がある。〈欲望的部分〉は金儲けを業とするもの、統治者を補助する部分が〈気概の部分〉で、〈理知的部分〉の補助者あり、そして政策を審議する部分が〈理知的部分〉に対応している。

### 1.1 魂の不死性

常に動いて止まぬものは不死なるものである。プラトンは、「他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるところのものは、動くのをやめることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる」<sup>10</sup>と言う。他によって動かされるものは不死ではない。しかし、「ただ自己自身を動かすもののみが、自己自身をみずてることがないから、いかなるときにもけっして動くのをやめない」<sup>11</sup>と言う。これは、「動の源泉」となり、「始原」<sup>12</sup>となるものである。魂の本質は、「自己自身によって動かされるということこそまさに、魂のもつ本来のあり方であり、その本質を喝破したものだ」<sup>13</sup>とプラトンは言う。外の力によって動かされるものは、魂のない無生物であり、内から自己自身の力で動くものは、魂をもっているのである。これは魂の本質から得られる結果である。魂が魂自身をうごかしているとき、「魂は必然的に、不生不死のもの」<sup>14</sup>と言える。

### 1.2 魂の相

既に、魂の三分説を見てきたが、魂の内部に入ってその三者の関係を見てみよう。魂は何に似ているのかを譬えてプラトンは示している。プラトンは、魂の相を譬えて表すのであるが、「魂の似すがたを、翼を持った一組の馬と、その手綱をとる翼を持った馭者とが、一体になってはたらく力であるというふう」<sup>15</sup>に想定している。プラトンは、魂が二頭の馬と一人

<sup>8</sup> 前掲書『国家（上）』439E（第4巻第14章、355ページ16行目）。

<sup>9</sup> 前掲書『国家（上）』440B（第4巻第15章、357ページ3から6行目）。

<sup>10</sup> 前掲書『パイドロス』245C（56ページ7から8行目）。

<sup>11</sup> 前掲書『パイドロス』245D（56ページ6から9行目）。

<sup>12</sup> 始原とは、生じることがないものである。また、他方、これは減びることがないものである。

<sup>13</sup> 前掲書『パイドロス』245E（57ページ9から10行目）。

<sup>14</sup> 前掲書『パイドロス』246A（57ページ14から15行目）。

の馭者によって構成され、一頭の馬（右の馬）は、端正な姿、美しい四肢、高いうなじ、威厳のある<sup>かぎ</sup>鉤鼻、白い毛並み、黒い目をし、節度と慎みを併せ持った名誉を愛好する<sup>16</sup>資質で美しく、血筋も善い馬で、他のほうは、歪んだ形、贅肉で重苦しく、でたらめな軀の組み立て、太いうなじ、短い頸、平たい鼻、どす黒く、灰色の血走った目をし、放縦と高慢な<sup>17</sup>資質も醜く、血筋も悪い馬であった。馭者は、正反対の資質ならびに血筋をもつ二頭の馬を制御する仕事をする。一組の馬がもっている翼の機能として、「神にゆかりある性質—それは、美しきもの、智なるもの、善あるもの、そしてすべてこれに類するものである」<sup>18</sup>と説いている。プラトンは、魂を二頭の馬と馭者から構成されるものに喩え、そして、3要素から構成される魂について、理知的部分を善い馬に対応させ、悪い馬を欲望的部分に対応させ、馭者を気概の部分に対応させている。

魂を自分で自分を動かすものとして捉える点がプラトン哲学の特徴である。このことによって、個々の人間の精神の活動とその不滅性を描くことを可能にしている。それには、魂と宇宙の中での太陽・月や星辰（星など）の天体の運行の基本とする「動」との関連性を認めることができる。

### 1.3 生けるものの不死性ならびにその死滅性

魂は、その翼によって宇宙を動き回り、「魂なきものの全体を配慮し、時によりところによって姿を変えながら、宇宙をくまなくめぐり歩く」と魂の天空での動きをプラトンは説く。翼のそろった魂（完全な魂）は、天空高く翔け上がって宇宙の秩序を制御するが、しかし、翼を失うと、天空から地上に転落し、大地を捕まえ、大地に住みつくことになる。この大地が人間の肉体に喩えられる。そして、魂は大地の生き物に住み着く。プラトンは「つかまえられた肉体は、そこに宿った魂の力のために、自分で自分を動かすようにみえるので、この魂と肉体とが結合された全体は、「生けるもの」と呼ばれ、そしてそれに「死すべき」という名が冠せられることになったのである」<sup>19</sup>と説明する。プラトンは、人間を死すべき者であるとするが、しかし神を不死なる生きものとして作り上げている。神というものを不死なる生き物として作り上げるが、すなわち、「魂を持ち、肉体を持ち、しかも両者は永遠に結合したままにいるものというかたちで、その姿を作りあげるのである」<sup>20</sup>とプラトンは説明する。

<sup>15</sup> 前掲書『パイドロス』246A（58ページ6から7行目）。翼をもつ馬は、魂が自由に動き回り、停止することがないことを可能にしている。

<sup>16</sup> 前掲書『パイドロス』253D（77ページ5から8行目）参照。

<sup>17</sup> 前掲書『パイドロス』253E（77ページ9から11行目）参照。

<sup>18</sup> 前掲書『パイドロス』246E（59ページ16から60ページ1行目）。

<sup>19</sup> 前掲書『パイドロス』246C（59ページ2から5行目）。

<sup>20</sup> 前掲書『パイドロス』246D（59ページ8から9行目）。

生き物が魂と一体になるときに不死なるものとして姿をあらわすが、魂がそこから離れると死滅するのである。生き物としての人間も魂と一体化するときには不死性を顕在化するのである。

#### 1.4 天界での神々ならびに魂：魂はなぜ大地に落ちるのか：魂の階層性

古代ギリシャにおいては、天界には偉大なる神ゼウスが存在していたと考えられる。プラトンもこの先祖の神の存在を信じ、敬虔な生活をおくることを期待していたと思われる。古代ギリシャの人々にとっては、神ゼウスは天界の指揮者であった。プラトンは、天界の指揮者ゼウスを「翼ある馬車を駆り、万物を秩序づけ、万物を配慮しながら、さきがけて進み行く」<sup>21</sup>と語って説明し、これに続けて、炉を護る神ヘスティアを除いた11の部隊<sup>22</sup>に配置された神々とダイモーン（鬼神、神霊）はそれに従い、そして「隊長の地位に任ぜられている神々は、それぞれ自分が配置された隊列にあつて指揮をとる」<sup>23</sup>とゼウスに従う神々の行いを説明する。天球<sup>24</sup>の内側では、「あまたの祝福された光景、あまたの祝福された行路があり、幸福な神々の種族は、それぞれ自らの任務をはたしつつ、この幸多き旅路をめぐり歩くのである」<sup>25</sup>と天球の内側で神々に指揮された幸福な光景が説明される。この行進に付いていくことを望み、「ついて行くことのできる者は、誰でも行進に参加する。神々の合唱隊には、嫉みというものがないのだから」<sup>26</sup>と説明する。

<sup>21</sup> 前掲書『パイドロス』247A (60ページ4から5行目)。

<sup>22</sup> この11の部隊をそれぞれ指揮しているのは、ゼウスに使える11の神々であった。すなわち、オリンポスのゼウス以下の11神であった。ゼウスの妻であったヘラ (Hera), ポセイドン (Poseidon), デメテル (Demeter), アポロン (Apollo), アルテミス (Artemis), アレス (Ares), アプロディテ (Aphrodite), ヘルメス (Hermes), アテナ (Athena), ヘパイストス (Hephaistos), そしてヘスティア (Hestia) であった。

ポセイドン (Ποσειδών) は、海と地震を司る神であった。デメテル (Δημήτηρ) は、豊穡のかみであり、穀物の栽培を人間に教える女神であった。アポロン (Απόλλων) は、詩歌や音楽などの芸術・芸能の男神であり、神託を受ける予言の神であり、光明の神でもあった。また羊飼いの守護神でもあった。アルテミス (Άρτεμις) は、狩猟・貞潔の女神であった。また月の女神とされた。アレス (Άρης) は、戦いの神である。アプロディテ (Αφροδίτη) は、愛と美の女神であった。また戦いの神の側面もあった。ヘルメス (Ερμής) は、多面的な性格を持つ青年神である。幸運と富を司り、牧畜、盗人、賭博、商売、交易、交通、道路、市場、競技、体育などの神である。また雄弁と音楽の神であり、旅人・商人の守護神でもあった。神々の伝令者 (ゼウスの使い) であった。アテナ (Αθηνά) は、知恵、芸術、工芸、戦略を司るギリシア神話の女神であった。ヘパイストス (Ήφαιστος) は、鍛冶と火山の神である。ヘスティア (Εστία) は炉の女神である。

<sup>23</sup> 前掲書『パイドロス』247A (60ページ7から8行目)。

<sup>24</sup> プラトンが宇宙をどのように見ていたのかについては、彼の『ティマイオス』により詳しく展開され説明されているが、プラトンは宇宙は有限であり、境界があると考えている。その境界の外には、一体何があるのか、人間には分からないが、人間を超えた神あるいは魂の働きによって理解可能であると考えていたのであろうか。

<sup>25</sup> 前掲書『パイドロス』247A (60ページ9から10行目)。

さらに、不死なる魂（神々の魂）は、半円の天球の外側に進み出て、その背面に立ち「天の外の世界を観照する」<sup>27</sup>とプラトンは説く。回転する天球に乗って「天のかなたの領域に位置を占めるもの、それは、真の意味においてあるところの存在一色なく、形なく、触れることもできず、ただ、魂のみちびき手である知性のみが見ることのできる、かの《実有》である」<sup>28</sup>を観照し真実を見るのである。プラトンは、魂の導き手である知性が実有<sup>29</sup>を見ることができると考えている。プラトンのこの見解に、理知主義の根本思想を見る思いがする。魂が天球の外を客観的に認識し、その存在を事実として魂に刻む。「真実なる知識とはみな、この《実有》についての知識なのだ。されば、もとの神の精神は一そして、自己に本来適したものを摂取しようと心がけるかぎりのすべての魂においてもこのことは同じであるが一けがれなき智とけがれない知識とによってはぐくまれるものであるから」<sup>30</sup>、「真実在を目にしてよろこびに満ち、天球の運動が一まわりして、もとのところまで運ばれるその間、もろもろの真なるものを観照し、それによってはぐくまれ、幸福を感じる」<sup>31</sup>と言う。天球を一周する道すがら、魂が観照するものは「《正義》そのものであり、《節制》であり、《知識》である」<sup>32</sup>が、この知識について、プラトンは「ほんとうの意味であるものだという、そういう真実在の中にある知識なのである」<sup>33</sup>と説明する。プラトンは知識が純粹に理性で捉えられると考えている。

筆者は、プラトンの認識姿勢は理性至上主義者であると理解する。プラトンは、「神の精神は一そして、自己に本来適したものを摂取しようと心がけるかぎりのすべて魂においてもこのことは同じであるが一けがれなき智とけがれなき知識とによってはぐくまれるものであるから、いま久方ぶりに真実在を目にしてよろこびに満ち、天球の運動が一まわりして、もとのところまで運ばれるその間、もろもろの真なるものを観照し、それによってはぐくまれ、幸福を感じる」<sup>34</sup>と言うように、プラトンは知識（あるいは智）が魂を育み幸福にすると考えている。この知識は、「生成流転するような性格をもつ知識ではなく、また、いまわれわれがふつうにあると呼んでいる事物の中にあつて、その事物があれこれと異なるにつれ異った知

<sup>26</sup> 前掲書『パイドロス』247A（60ページ11から12行目）。

<sup>27</sup> 前掲書『パイドロス』247C（61ページ6行目）。

<sup>28</sup> 前掲書『パイドロス』247C（61ページ11から13行目）。

<sup>29</sup> プラトンは、「真実なる知識とはみな、この《実有》についての知識なのだ」と理解している（前掲書『パイドロス』247D（61ページ14から15行目））。

<sup>30</sup> 前掲書『パイドロス』247CからD（61ページ13から62ページ1行目）。

<sup>31</sup> 前掲書『パイドロス』247D（61ページ1から3行目）。

<sup>32</sup> 前掲書『パイドロス』247D（62ページ3から4行目）。

<sup>33</sup> 前掲書『パイドロス』247E（62ページ6から7行目）。

<sup>34</sup> 前掲書『パイドロス』247D（61ページ15から62ページ3行目）。



識となるごとき知識でもない。まさにこれこそほんとうの意味であるものだ<sup>35</sup>と説明している。真実在としての知識である。

プラトンは魂の階層性を想定しているが、その階層性が現実の多種多様な人間存在を説明することになる。実際、上で見た魂以外の他の魂は、真実在を觀照し得るのであるか。神に最もよく倣う魂は、馭者の頭をあげて「天外の世界に超出させ、回転する天球の運動に神々とともに運ばれながら、馬たちにわずらわされつつも、かろうじてもろもろの真実在を觀得する」<sup>36</sup>、また「馬たちが暴れるものだから、そのために、真実在のあるものを目にするけれども、あるものを見そこなう」<sup>37</sup>魂もあるが、その他の魂たちは、神の進行に付いていこうとするが、力及ばず、天の表面の下側から出られず、天球と共に運ばれるが、「互いに他の前に出ようともがきながら、踏み合い、つき合いする」<sup>38</sup>。ゆえに、生じることは、壮絶な「擾乱と抗争と苦渋の汗とであって、馭者の不手際のために、多くの魂がかたわものとなり、また多くの魂が多くの翼を傷つき折られるのは、じつにこのときなのである」<sup>39</sup>とプラトンは説明する。これらの魂は、真実在の觀照によって浄められることはなく、「思惑(ドクサ)をもって身を養う糧にする」<sup>40</sup>と説明される。

プラトンは、アドラスティア<sup>41</sup>の掟について述べている。凡ての魂は、神の進行に倣って真実在を觀照し、觀得したならば、次の回遊まで禍いを免れることができる。回遊ごとにそれを免れることが出来る。しかし、一度神の進行について行けなくなると、真実在を見そこない、「何らかの不幸のため、忘却と悪徳とにみたされて重圧を負い、この重さによって翼を損失し、地上に墜ちた場合」<sup>42</sup>の法が定められると言う。

地上に墜ちた魂を9相に分けて説明している。次の1から9によって説明される。第一の階層にふくめられるのは、神に最も倣って生活する人達であるが、

1. 真実在を最も多く見た魂は、知識人、美を愛する人、楽を好むムウサの僕、そして恋に生きるエロスの徒なるべき人間の種の中に植え付けられる。
2. 第2番目の魂は、法を守り、戦いと統治に秀でた王者となるべき人の種の中に植え付けられる。
3. 第3番目の魂は、政治に携さわる人、家を<sup>ととの</sup>齊える人あるいは財をなす人の種の中に植

<sup>35</sup> 前掲書『パイドロス』247E (62ページ4から7行目)。

<sup>36</sup> 前掲書『パイドロス』248A (62ページ13から15行目)。

<sup>37</sup> 前掲書『パイドロス』248A (63ページ1から2行目)。

<sup>38</sup> 前掲書『パイドロス』248A から B (63ページ4から5行目)。

<sup>39</sup> 前掲書『パイドロス』248B (63ページ5から7行目)。

<sup>40</sup> 前掲書『パイドロス』248B (63ページ9行目)。

<sup>41</sup> 古代ギリシヤにおいて、立法を司る女神である。

<sup>42</sup> 前掲書『パイドロス』248D (64ページ4から5行目)。

え付けられる。

4. 第4番目の魂は、労苦を愛する体育家、肉体の治療に携わるべき人の種の中に植え付けられる。
5. 第5番目の魂は、占い師の生活、何らかの宗教的儀式に携わる生を送るであろう。
6. 第6番目の魂には、創作家、模倣を仕事とする人たちに属する者の生が適合する。
7. 第7番目の魂には、職人、農民の生が適合する。
8. 第8番目の魂には、ソフィストあるいは民衆扇動家の生が適合する。
9. 第9番目の魂には、僧主の生が適合する

とプラトンは定めている<sup>43</sup>。この掟をまもり、「正しい生活を送った者は、よりよい運命にあずかり、不正な生活を送った者は、より悪い運命にあずかるものになる」<sup>44</sup>とプラトンは言う。魂がもとの状態に戻るには、プラトンは1万年を要するという。すなわち、翼は1万年後でなければ再生しないという。ただし、例外がある。誠心誠意、知を愛し求めた魂、あるいは、知を愛するところと美しい人を恋する想いを一つにした熱情の中で生を送った人の魂は例外で、その魂は1千年の周期が3回目になり、3回続けてそのような生活を送る人には、翼は生じて、3千年で戻っていきける。

それ以外の魂たちは、「最初の生涯を終えると、裁きかけられ、裁かれてのち、あるものは地下の世界にある仕置きのおもむいて、正当な罰をうけ、またあるものは、司直の女神デイケにより天上のある場所にはこびあげられて、人間の姿において送った生活の功により、それにふさわしい生をそこで送る」<sup>45</sup>と説明される。そして、千年目の年に、そのどちらの魂も「第二回目の生をくじ引きで選ぶためにやってきて、それぞれが欲するような生活を選ぶ」<sup>46</sup>とある。ここでそれぞれが欲するような生活を選ぶとあるが、魂は上の1番目から9番目の生（生活）のいずれかを選ぶことが出来る。もし魂がかつて一度も真実を見た試しがなければ、魂は人間の姿の中に入ってくることが出来ない。というのは、人間の知る働きは実有（真の意味においてあると言うところの存在）にたどり着くことであるが、それは魂

---

<sup>43</sup> この掟については、前掲書『パイドロス』248DからE（64ページ7から65ページ3行目）参照。

<sup>44</sup> 前掲書『パイドロス』248E（65ページ4から5行目）。

<sup>45</sup> 前掲書『パイドロス』249A（65ページ12から15行目）。プラトンの『国家（下）』614Bから615D（第10巻第13章、397ページ15から401ページ115行目）で述べているエルの物語において、あの世から蘇ったエルが天での裁きがエルの口を通して説明されている。「天の穴と地の穴とのあいだに、裁判官がたちが座っていた。彼らは、そこへやってくる者をつぎつぎと裁いては判決をくださったのち、正しい人々に対しては、その判決の内容を示す印しを前につけたうえで、右側の、天を通過して上に向かう道を行くように命じ、不正な人々に対しては、これもまたそれまでにおかしたすべての所業を示す印しをうしろにつけて、左側の下へ向かう道を行くように命じていた」とある。裁きによって、正しい者は天に、不正な者は地の下に送る判決を示している。

<sup>46</sup> 前掲書『パイドロス』249B（65ページ15から16行目）。

が神の進行に伴って目にしたところのあるものを想起することであるからである。魂は神に倣って進行し、見たものを想起する。これがプラトンの想起論<sup>47</sup>の原点である。この想起によって人間は知識を獲得すると想起説<sup>48</sup>は説明する。神々の進行に倣って事物を観照し、その事物を想起することによって、真実在を知ることになる。プラトンは、哲人の精神のみが翼を持つことになると言う。というのは、哲人の精神は「力のかぎりをつくして記憶をよびおこしつつ、つねにかのもののところに一神がそこに身をおくことによって神としての性格をもちうるところの、そのかのもののところに一自分をおくのであるから」<sup>49</sup>と説明する。

プラトンは、真実在の観得にいたることを秘儀<sup>50</sup>に与ることとして説明している。この秘儀に参加することによって、「言葉のほんとうの意味において完全な人間になる」<sup>51</sup>とプラトンは説明し、そのような人は、「多くの人たちから狂える者と思われて非難される」<sup>52</sup>と説明している。哲人の精神がその秘儀に参加することを可能にするが、他方で、この世では、哲人は狂人と扱われる。

## 第2節 狂気としての恋（エロス）ならびに愛の情念

### 2.1 狂気と神憑りならびに美の真実在

プラトンは、この世の美を見て、真実の美を想起し、神憑りの状態になって、美しい人たちに従おうとして狂気に陥る人を「恋する人」（エラステース）<sup>53</sup>という。恋してくれる人に身を任せることの方が正しいことを立証している<sup>54</sup>。すなわち、彼は、リシュアスの見解で

<sup>47</sup> プラトン著（藤沢令夫訳）『メノン』85D（66ページ5から9行目）において、自分で自分の中から知識を再び取り出すことによって、知識をもつようになると言い、このように自分で自分の中で再度知識を把握し直すことを想起することと説明している。

<sup>48</sup> プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『パイドーン』73AからB（138ページ1から5行目）において、「人間は質問されることによって、もしその質問が上手にされさえすれば、ものごとがどうなっているかを自分ですべて説明することができる、ということだ。しかもこのことは、もし人間が知識や正しい説明を自分の中にすでにもっているものでなければ、不可能ではないか」と説明している。このことから分かるように、想起できるのは、本質（そのもの）を知っているからである。たとえば、「等しいそのものとは別のものである、それらの等しい事物から、かの等しさそのものを思い浮べそれを知るに到った」とプラトンは言う（上掲書『パイドーン』74C（141ページ10から11行目））。

<sup>49</sup> 前掲書『パイドロス』249C（66ページ12から14行目）。

<sup>50</sup> 前掲書『パイドロス』250BからC（68ページ14から69ページ8行目）参照。また同書訳注（168ページ7から169ページ3行目）に秘儀の意味について簡潔に説明されている。

<sup>51</sup> 前掲書『パイドロス』249D（66ページ16行目）。

<sup>52</sup> 前掲書『パイドロス』249D（67ページ1から2行目）。

<sup>53</sup> 前掲書『パイドロス』249DからE（67ページ5から11行目）参照。

<sup>54</sup> プラトンは、パイドロスによって語られた、恋していない者に身を任せるべきであるという話とは、逆の結果になることを証明しようというものである。

ある、恋している人は狂っていて、恋していない人は正気であるという見解が誤りであることを立証している。

実際「われわれの身に起こる数々の善きものの中でも、その最も偉大なるものは、狂気を通じて生まれてくる」<sup>55</sup>とプラトンは言う。この狂気は「神から授かって与えられる狂気であればならないけれども」<sup>56</sup>と付け加えている。プラトンにとって、あるいは古代のギリシャ人にとって、神は無条件に正しい存在であったと考えられる。よって、エロスはアプロディティの子<sup>57</sup>であるので、エロスが悪であるはずがないと捉えることにプラトンは疑問を持ち得なかった。リュシ阿斯<sup>58</sup>は、恋しない人は正気であるが、恋する人は狂っている<sup>59</sup>と言うが、それは正しくはない。何故なら、エロスは神の子であるとソクラテス（すなわちプラトン）は考えている。「デルポイの巫女も、ドドネの聖女たちも、その心の狂ったときこそ、ギリシアの国々のためにも、ギリシア人のひとりひとりのためにも、実に数多くの立派なことをなしとげたのである」<sup>60</sup>とプラトンはソクラテスに語らせている。プラトンは、古代ギリシャ人の伝統からリュシアスの見解が間違いであり、自身を恋している人に身を任せることの方が有益であり善いであると説明し主張している。

プラトンは、神に憑かれたときの予言の力をも狂気的一种であるとみている。第一番目の狂気は予言術としての狂気が人を有益にすることを説明する。プラトンは「シビュラをはじめ

<sup>55</sup> 前掲書『パイドロス』244A（52ページ9から10行目）。

<sup>56</sup> 前掲書『パイドロス』244A（52ページ10から11行目）。

<sup>57</sup> 前掲書『パイドロス』242D（48ページ10行目）。

<sup>58</sup> リュシ阿斯（Λυσίας, Lysias）（前445年頃生-前380年頃没）は、前4から5世紀に活躍した弁論家。ソフィストとは一線を画する純粋な弁論家であったと思われる。彼の父ポレマルコスは、アテナイの外港ペイライエウスに住んでいたシュラクサイ生まれの富裕な居留者で、法廷弁論の執筆を請け負ってロゴグラボス（弁論代作人＝話を書く人）（前掲書『パイドロス』257C（86ページ7から8行目））として活動した。リュシ阿斯は、彼の兄ポレマルコと共にイタリアの新興都市トゥリオイに移住していたが、ペロポネス戦争中の前412年にアテナイに引き上げてきた。ペロポネス戦争後、前404年に成立した三十人独裁政権の手によって、彼の兄ポレマルコスは捕えられ処刑された。彼自身は一時国外に逃れてメガラにいた。

<sup>59</sup> 前掲書『パイドロス』244A（52ページ6から7行目）において、リュシアスの物語に関して「一方の人が狂気であるのに対して、他方が正気だからだ」と主張する物語りは、これは真実の物語ではない」とプラトンはソクラテスに言わしめている。ここで一方とは、恋する人であり、他方が恋していない人である。リュシ阿斯は狂気が無条件に悪であると決めているが、プラトンは狂気が神から授けられた狂気であると考えている。プラトンは、狂気には二つの種類があるとしている。「その一つは、人間的な病いによって生じるもの、もう一方は、神に憑かれて、規則にはまった慣習的な事柄をすっかりかえてしまうことによって生じるもの」と述べている（前掲書『パイドロス』265A（108ページ12から14行目））。さらに、神がかりによる狂気を四人の神々に結びつけている。「予言の靈感はアポロンが、秘儀の靈感はディオニソスが、他方また詩的靈感はムウサの神々が、第四番目のそれはアプロディテとエロースがつかさどる」と述べている（前掲書『パイドロス』265B（108ページ17から109ページ1行目））。

<sup>60</sup> 前掲書『パイドロス』244B（52ページ12から14行目）。ドドネはゼウスに連れ添った女神である。ドドネは、バルカン半島の西北の地を南北に走るエピロス山系にある、ゼウスの神託の座として知られていた。

めとして、そのほか、神に憑かれたときの予言の力を用いて、多くの人々に多くの事柄を予言し、まさにきたらんとする運命のために、正しい道を教えてやった人たち<sup>61</sup>を持ち出している。プラトンは、さらに、古代ギリシャの人たちは、狂気というものを非難すべきものと考えていたならば、「技術の中でも最も立派な技術、未来の事柄を判断する技術に、ちょうどこのマニアーという名前を織り込んで、この技術を「マニケー」（予言術＝狂気の術）と呼ぶようなことはしなかったであろう<sup>62</sup>と説明している。さらに、この予言術が占い術<sup>63</sup>よりも立派である<sup>64</sup>と説明している。また、第二番目の狂気は救済である。先祖の犯した罪のおかげによって、疾病と災厄に悩まされるとき、この救いを必要とする人たちに神に憑かれた狂気が乗り移り、その人々を破滅から救ったという事実を引き合いに出し、狂気が有益であることを示唆している。プラトンは、「この狂気は、神々への祈願と奉仕にすぎあって、それにより、罪を浄めるための儀式をさぐりあてて、そのときの災厄から解放される手段を、神に憑かれ正しい仕方ですら狂った者のために発見し、かくして自分がその心に乗りうつった人を、現在のみならず未来においても、完全に破滅から救ってやったのである<sup>65</sup>と説明している。プラトンは、第三番目の狂気として、ムッサ<sup>66</sup>の神々から授けられる神憑りと狂気を取り出している。「狂気は柔らかく汚れなき魂をとらえては、これをよびさまし熱狂せしめ、抒情のうたをはじめ、その他の詩の中にその激情を詠ましめる<sup>67</sup>とプラトンは説明している。ムッサの神々の授ける狂気に与ることのないままに「詩作の門にいたるならば、その人は、自分

<sup>61</sup> 前掲書『パイドロス』244B (52ページ15から53ページ2行目)。ここでのシビュラは神巫である。このシビュラという名は多くの土地につけられていて、その正体を正確には掴めないと言われている。

<sup>62</sup> 前掲書『パイドロス』244C (53ページ8から10行目)。

<sup>63</sup> 占い術を「オイオノイステイケー」と言われるが、プラトンによると、「思考のたすけをかり、人間の憶測（オイエーシス）をはたらかせて、未来への洞察（ヌゥス）と識見（ヒストリアー）を得るという事実にもとづき、この最後の三つの名前を組み合わせ、これを「オイオノイステイケー」（占い術）と名づけたのである」と解説されている（前掲書『パイドロス』244C (53ページ16から54ページ2行目)）。

<sup>64</sup> 前掲書『パイドロス』244D (54ページ6行目)において、古代ギリシャ人の証言として、「神から授けられる狂気は、人間から生まれる正気の分別よりも立派なものである」と引き合いに出している。ここでもプラトンは、人間を超える存在として神を位置づけている。

<sup>65</sup> 前掲書『パイドロス』244E (54ページ11から15行目)。

<sup>66</sup> ムッサ（ムーサ）(Μοῦσα) は、文芸・音楽を司る女神である。ヘシオドスの『神統記』では、9姉妹の女神が挙げられている。ここでは、プラトンもヘシオドスに倣っている。長女のカリオペ (Καλλιόπη, Kalliope) は、叙事詩を司る女神、クレイオ (Κλειώ, Kleiō) は歴史を司る女神、エウテルペ (Εὐτέρπη, Euterpe) は抒情詩の女神、テルプシコラ (Τερψιχόρα, Terpsichora) は合唱と舞蹈（舞踏）を司る女神、エラト (Ερατώ, Erató) は抒情詩や恋愛歌を司る女神、メルポメネ (Μελπομένη, Melpomenē) は悲劇を司る女神、タイレア (Θάλεια, Thaleia) は喜劇を司る女神、ポリュムニア (Πολυμνία, Polymniā) は賛歌を司る女神、ウラニア (Ὀὐρανία, Ūraniā) は天文を司る女神、であった。この説明した文芸・音楽を司る女神達の役割は後世（ローマ時代）に割り当てられたものである。

<sup>67</sup> 前掲書『パイドロス』245A (54ページ16から55ページ1行目)。

が不完全な詩人に終わる』<sup>68</sup>のみならず、彼の詩も「狂気の人々の詩の前には、光を失って消えさってしまう」<sup>69</sup>とプラトンは狂気秘儀を語る。プラトンは、ムウサ神達が人間の生まれ変わりとしての蟬に歌の贈り物をしたと考えている。プラトンは、「彼ら蟬たちの種族は、この世に生をうけると、何ひとつ身を養う糧を必要とせず、そして、生まれたすぐそのときから死んで行くその日まで、食わず、飲まず、ただひたすらうたいつづけ、そして、死んでからのちは、ムウサたちのもとへ行って、この世に住む人間どもの中の誰が、どのムウサの女神を敬っているかを、報告するという事になったのである」<sup>70</sup>と言うが、蟬たちの種族は人間の生まれ変わりであるという前提のもとに、ムウサ達の贈り物について説明している。プラトンは、テルプシコラ女神について、「合唱と舞踏の中にあつてこの女神に尊敬をささげた人々のことを報告して、そういう人々を、いっそうこの女神に愛されるように」<sup>71</sup>すると説明し、エラト女神は「恋に生きながらこの女神を崇敬した人々のことを」<sup>72</sup>告げると言う。特に、カリオペ女神とウラニア女神については高く持ち上げ、「知を愛し求める哲学のいとなみのうちに生を送り、この二人の女神の音楽に尊敬をささげる人々のことを報告するのだが、まことにこの二人の女神こそは、ムウサたちのなかでもとりわけ、天界のことと、神と人間の物語りとをつかさどる女神たちであつて、その送るうた声は、もっとも美妙なのである」<sup>73</sup>とプラトンは讚美している。

最後に、プラトンは、恋という狂気も人を幸にするために神々から授けられたものであることを物語る。その立証には手の込んだ手続きがとられているが、プラトンは、「単なる才人には信じられないが、しかし真の智者には信じられる」<sup>74</sup>と言う。「人がこの世の美を見て、真の美を想起し、翼を生じ、翔け上ろうと欲して羽ばたきするけれども、それができずに、鳥のように上の方を眺めやつて、下界のことをなござりにするとき、狂気であるとの非難を受ける」<sup>75</sup>と説明している。さらに、プラトンは、「この狂気こそは、すべての神がかりの状態のなかで、みずから狂う者にとつても、この狂気にとつてもあずかる者にとつても、もっとも善きものであり、またもっとも善きものから由来するものである」<sup>76</sup>と説明し、狂気は神が乗りうつった状態であると見做し、真の美を求める行為を狂気あるいは神憑りの結果である

<sup>68</sup> 前掲書『パイドロス』245A（55ページ3から4行目）。

<sup>69</sup> 前掲書『パイドロス』245A（55ページ4から5行目）。

<sup>70</sup> 前掲書『パイドロス』259C（91ページ10から14行目）。

<sup>71</sup> 前掲書『パイドロス』259CからD（91ページ14から16行目）。

<sup>72</sup> 前掲書『パイドロス』259D（91ページ16から17行目）。

<sup>73</sup> 前掲書『パイドロス』259D（92ページ2から5行目）。

<sup>74</sup> 前掲書『パイドロス』245C（56ページ1行目）。

<sup>75</sup> 前掲書『パイドロス』249D（67ページ5から7行目）。

<sup>76</sup> 前掲書『パイドロス』249E（67ページ8から10行目）。

と考えていると思われる。だから、美しい人を恋い慕う者がこの狂気に与るのであって、そして、この人は、「恋する人」(エラステース)、と呼ばれる。

それでは、恋してくれる人に身を任せることの方が正しいことを立証することにしよう。何故、美を求める者が狂気に陥るのであろうか。また何故狂気になる必要があるとプラトンは主張するのであろうか。美の真実在を通して、それを想起し、この世の美しい人に美を認めることになるが、プラトンは、「この世のものを手がかりとして、かの世界なる真実在を想起するということは、かならずしも、すべての魂にとって容易なわけではない。ある魂たちは、かの世界の存在を見たときに、それをわずかの間しか目にしなかつたし、またある魂たちは、この世に墜ちてから、悪しき運命にめぐり合せたために、ある種の交わりによって、道をふみ外して正しからざることへとむかい、むかし見たものものろ聖なるものを忘れてしまふからである」<sup>77</sup>と説明する。凡ての魂が、魂に階層性があるために、この世の美しい人を見て即座に美(真実在としての美)を認めることはなく、それぞれの魂で違いが生じるが、プラトンは、この世とかの魂の世界との対応で、美のイメージ(似姿)をなし、美しい人と真実在としての美を認識することを説いている。

このことは、真の美を魂が希求するところから狂気が生じるとプラトンは主張していると思われる。プラトンは、「美は、もろもろの真実在とともにかの世界にあるとき、燦然とかがやいていたし、また、われわれがこの世界にやってきてからも、われわれは、美を、われわれの持っている最も鮮明な知覚を通じて、最も鮮明にかがやいている姿のままに、とらえることになった」<sup>78</sup>と説明する。しかし、神に憑かれ狂っている人は、「その心は神の世界の事物とともにあるから、多くの人たちから狂える者よと思われて非難される」<sup>79</sup>が、というのは「神から靈感を受けているという事実のほうは、多くの人々にはわからないのである」<sup>80</sup>と説明する。

プラトンは、この世において美を人々が認め、それを詩にしたり、それを恋したりするのは、この世では狂気と非難されるが、神々の乗りうつって、神憑りになった結果であると説いている。そのことによって、美の真実在<sup>81</sup>にたどり着くとプラトンは説いているのであろう。

<sup>77</sup> 前掲書『パイドロス』250A (67ページ15から68ページ3行目)。

<sup>78</sup> 前掲書『パイドロス』250D (69ページ9から12行目)。

<sup>79</sup> 前掲書『パイドロス』249D (67ページ1から2行目)。

<sup>80</sup> 前掲書『パイドロス』249D (67ページ2から3行目)。

<sup>81</sup> 真実在はプラトンの哲学における「イデア」と言われているものである。プラトン自身は、真実在、実有などと言って、イデアとは言っていない。プラとオンの真実在をイデアと呼んだのはアリストテレスであった。また、「美そのもの」も《美のイデア》を意味する。

## 2.2 魂と真実在, そしてこの世: 愛の情念

プラトンは、美そのものを極める秘儀を受けた経験のある者とその経験のない者の違いを説明している。その経験のない者は、真実在としての美の奥義<sup>82</sup>を忘れた人、あるいは墮落した者は「この地上において美の名で呼ばれるものをみても、この世界からかの世界なる《美》の本体へむかって、すみやかに運ばれることはない。したがって、そういう者は、美しい人に目を向けても、畏敬の念をいさぐこともなく、かえって、快樂に身をゆだね、四つ足の動物のようなやり方で、交尾して子を生もうとし、放縦になじみながら、不自然な快樂を追いかけることを、おそれもしないければ、恥じもしないのである」<sup>83</sup>と説き、一方、その経験を有する者は、かつて真実在としての美を十分に観得しているので、「美をさながらにうつした神々しいばかりの顔だちや、肉体の姿などを目にするときは、まず、おののきが彼を貫き、あのとときの畏怖の情の幾分かがよみがえって彼を襲う。ついで、その姿に目を注ぎながら、身は神の前に在るかのように、恐れ慎しむ」<sup>84</sup>とプラトンは説明する。また、プラトンは、聖像や神々に対する如きに「彼はその愛人にいけにえを捧げる」<sup>85</sup>かもしれないし、悪寒に襲われ、その反作用として「その後直ぐに異常な汗と熱とが彼をとらえる」<sup>86</sup>こともあると説明している。

ここに愛の情念が生まれるのであるが、プラトンはその情念をどの様に説いているのであろうか。人が自身を生贄として捧げ、悪寒に襲われ汗をかくのは、「彼が美の流れを一翼にうるおいをあたえる美の流れを一眼を通して受け入れたために、熱くなったからにはほかならない」<sup>87</sup>と説明し、そのとき、「この熱によって、翼が生え出てくるべきところがとかされ」<sup>88</sup>、次には、「いまや養分がすぎこまれると、翼の軸は膨れ、その根から、魂の姿を蔽うまでに成長しようとする躍動をはじめ。魂はもと、その全体にわたって、翼を持っていたのだから」<sup>89</sup>と説明している。その人の魂は、翼が生じるときには、熱く沸き立ち、いらいらし、うずく

<sup>82</sup> 奥義の例を挙げてみると、プラトンの（久保 勉訳）『饗宴』211（126 ページ2 から7 行目）において、愛の奥義に至るとは、「地上の個々の美しいものから出発して、かの最高美を目指して絶えずいよいよ高く昇り行くこと、ちょうど梯子の階段を昇るようにし、一つの美しき肉体から二つのへ、二つのからあらゆる美しき肉体へ、美しき肉体から美しき職業活動へ、次には美しき職業活動から美しき学問へと進み、さらにそれらの学問から出発してついにはかの美そのものの学問に外ならならぬ学問に到達して、結局美の本質を認識するまでになることを意味する」と説明している。ここで、美そのもの、あるいは、美の本質、とは、《美のイデア》のことになる。

<sup>83</sup> 前掲書『パイドロス』250E から251A（70 ページ3 から8 行目）。

<sup>84</sup> 前掲書『パイドロス』251A（70 ページ10 から12 行目）。

<sup>85</sup> 前掲書『パイドロス』251A（70 ページ14 行目）。

<sup>86</sup> 前掲書『パイドロス』251B（70 ページ15 行目）。

<sup>87</sup> 前掲書『パイドロス』251B（70 ページ16 から71 ページ1 行目）。

<sup>88</sup> 前掲書『パイドロス』251B（71 ページ1 から2 行目）。

<sup>89</sup> 前掲書『パイドロス』251B（71 ページ3 から5 行目）。



ものを感じ、その魂が少年に具わる美を目の当たりにして、「そこから流れやってくる粒子—このように粒子（メレー）の流れ（ロエー）の放射（ヒーエナイ）であるがゆえに、それは「愛の情念」とよばれるのであるが—この「愛の情念」を受け入れて、うるおいをあたえられ、熱くなるとき、魂はそのもだえから救われて、よろこびにみたされることになる」<sup>90</sup>と説明している。プラトンは、愛の情念（ヒメロス）については、恋する人の視覚を通じて、対象（美しい人）から流れくる粒子の放射であると規定している。

プラトンは、魂が美しい相手から引き離されたときのその様子、ならびに美しい人を認めた時の喜びについて説いている。その引き離されたときの魂の様子は、この世の人には、狂ったように思われるかも知れない。引き離されたときには、その魂の翼の生えでる口も渴き、ふさがり、翼の芽生えが閉じられるために、情念と共に内部に閉じ込められたその魂の芽は、跳びはね、自分の出口を刺激するので、「魂は、くまなくつつきまわられて、荒れ狂い、もだえ苦しむが、しかし一方、記憶にまざまざと残る美しい人の面影は、この魂によるこびをあたえる。こうしてよろこびと苦しみとがまじり合うために、魂は味わったこともない不思議な感情にいたく惑乱<sup>わくらん</sup>し、なすすべを知らずに狂いまわり、そして、狂気にさいなまれて、夜は眠ることができず、昼は昼で、一ところにじっとしていることができず、ただせつない憧れにかられて、美しさをもっているその人を見ることができると思うほうへ、走って行く」<sup>91</sup>と説明している。すなわち、この状態が一種の狂った状態であり、他の人には狂気と思われる。しかし、その美しい人の姿を認め「愛の情念に身をうるおすや、魂は、それまですっかりふさがっていた部分を解きひらき、生気をとりもどして刺戟と苦闘から救われ、他方さらに、このくらべるものとてもない甘い快樂を、その瞬間に味わうのである」<sup>92</sup>と説いている。そして、プラトンは「できることなら離ればなれになろうとはしないし、また、その世の何びとをも、この美しい人よりも大切に思うようなことはない」<sup>93</sup>とこの世で美を具現化している対象にのめり込むと説明している。だから、親兄弟をも忘れ、財産をも意に介することがなくなるだけでなく、社会の法規や世間体などもないがしろにし、出来るならば「恋いこがれているその人のできるだけ近くで、夜を過そうとする」<sup>94</sup>と説いている。

<sup>90</sup> 前掲書『パイドロス』251C (71 ページ 6 から 15 行目) 参照。

<sup>91</sup> 前掲書『パイドロス』251D から E (72 ページ 4 から 9 行目)。

<sup>92</sup> 前掲書『パイドロス』251E から 252A (72 ページ 11 から 13 行目)。

<sup>93</sup> 前掲書『パイドロス』252A (72 ページ 12 から 14 行目)。

<sup>94</sup> 前掲書『パイドロス』252A から B (72 ページ 17 から 73 ページ 1 行目)。プラトンは、前掲書『饗宴』211 (126 ページ 9 から 13 行目) において、美そのものに至ってこそ生甲斐があり、美の本質（あるいは美そのもの）に至った「貴方はそういうものを見て夢中になり、貴方も他の多くの人も、愛人に眺め入って絶えずこれと一緒にいられさえすれば、できることなら、食いもせず飲みもせず、ただこれを眺め、これと一緒にいたいと願っているのです」と説明している。

ゆえに、「その身に美をそなえた人こそ、この魂の畏敬のまどであるのみならず、最大の苦悶をいやしてくれる人としてこの世に見出すことのできた、たったひとりの医者なのである」<sup>95</sup>とこの世の美しい人への狂ったような思い入れが、その人の苦悶を解き放す医師となる、とプラトンは恋する人の魂の輝きを讃美するのである。プラトンは、美を慕い畏敬し、最大の苦悶から癒やされる心情を恋（エロース）と言っている。あるいは、その心情をもたらすこの世の人に寄り添っていたいという心持ちに至らしめる愛の情念を説くのである。すなわち、プラトンは、この世でのエロースすなわち「愛の情念」の効果を前向きに説いている。愛の情念が、リシユアスの見解である、恋している人は狂っていて、恋していない人は正気であるという見解が誤りであることを立証する立論になっている。

### 2.3 愛ならびに神に倣う

この世の者が美しい人を恋するとき、どの様にあるべきかについて、プラトンはその見解を述べている。彼は、「各人は、美しい人たちを恋するにあたって、それぞれ自分の性格にしたがって恋の相手を選択し、そして選んだ相手その人を神とみなしつつ、崇敬し礼拝するためにいわば自分の聖像として仕立て上げ、飾るのである」<sup>96</sup>と説いている。プラトンは、自分の神を敬い、できるかぎり神を見習って、その生を送ることをよしとしている。すなわち、プラトンは「ゼウスの従者であった人々は、自分たちによって恋される者の魂が、何かゼウスに似た性格をもっていることを求める。そこで彼らは、相手が生まれつき知を愛し、人の長たるにふさわしい天性をもっているかどうかをしらべ、求めるとおりの相手を見出してその人を恋するようになると、あらゆる手段をつくしてその天性が実現するようにつとめる」<sup>97</sup>と神を讃美し、神に倣うことを積極的に説いている。プラトンは、愛人に神の天性を認め、そして相手を手にするときには、「自分自身も神をみならうとともに、愛人にも同じようにすることを説得したり、そのための訓練をほどこしたりしながら、それぞれの力でできるかぎり、その神の生き方に従いその神の姿に近づくようにと、愛人を導いて行くのである」<sup>98</sup>と説いている。

このように、プラトンは、愛人を自分に、最終的には、自分の尊敬する神に、力を尽くし出来る限り、完全に似た人間にしようとする努力・行為を讃美している。

それでは、恋する人の愛人は、どの様にして恋する人を受け入れ、手にするのであろうか。心の底から恋している者によって、その身体は「神のごとくありとあらゆる奉仕を受け

<sup>95</sup> 前掲書『パイドロス』252B（73ページ1から3行目）。

<sup>96</sup> 前掲書『パイドロス』252D（74ページ11から14行目）。

<sup>97</sup> 前掲書『パイドロス』252E（74ページ16から75ページ3行目）。

<sup>98</sup> 前掲書『パイドロス』253B（76ページ1から3行目）。

る]<sup>99</sup>とプラトンは言う。たとえ、誰かから恋する者に近づくのは恥すべきことだと説かれ、恋する人を避けることがあったとしても、「年齢が熟するのと、ものごとの必然のなりゆきの結果として、彼は自分を恋している者を、交際の相手として受け入れるようになるのである」<sup>100</sup>と言い、相手も恋している者を受け入れるようになることを説いている。そして、愛人は「ひとたび相手を迎え入れ、その語りかける言葉や交わりを受け入れてみると、恋する者がもつ優しい心情が身近かに感じられて、恋される者の心は感動に打たれる」<sup>101</sup>とプラトンは愛される人が恋する人を受け入れる様子を明かにしている。その上、愛人は「神に憑かれたこの一人の親しい人に比べれば、他のすべての友たち、すべての身内の者たちを、よし一緒に合わせてたとしても、彼らの与える友愛などは、ものの数にも入らないということ」<sup>102</sup>感じると状態に愛人が陥るとプラトンは説くのである。

この状態が続くと、愛人から流れ出る愛の情念が、恋する人に向かって流れ出し、彼の中に吸い込まれ、一杯に満ちると、外に溢れ出し、「ふたたびもと来た美しい愛人のもとへと帰り、眼を通して中へはいる。中へはいったこの流れが、本来通るべき路をへて魂にまで行き着き、彼の心をかきたてるとき、それは翼の出口をうるおし、翼が生えんとする衝動をあたえ、そして、こんどは恋されている者の魂を、恋でみたすことになるのである」<sup>103</sup>と愛人と恋する人が共に相手を求める状態にいたる様子を簡潔に説明している。このようにして、愛人も恋に陥る。しかし、愛人は「自分を恋している人の中に、自分自身をみとめているのだということが、彼には気がついていない」<sup>104</sup>のである。つまり、愛人は何に恋しているのかわからないのである。彼は、「彼を恋している人がそばにいれば、その人と同じように彼のもたえはやみ、はなれていれば、またも同じように、互にせつなく求め合う」<sup>105</sup>ことが、恋であると気づいていないのである。愛人は恋ではなく、友情であると思って、「彼の心にやどるものは、映ってできた恋の影、こたえの恋（アンテロース）なのだ」と愛人は勘違いする。愛人は、自分を慕っている人の欲望と恋の影の形に寄り添うが、「その人の姿を見、そのか

<sup>99</sup> 前掲書『パイドロス』255A (80ページ1行目)。

<sup>100</sup> 前掲書『パイドロス』255A から B (80ページ5から7行目)。この引用で、ものごとの必然のなりゆき結果、によってプラトンは何を意味しているのか不明である。また、この引用の直ぐ後 (80ページ7から9行目) で、「まことに、運命のさだめは、悪しき者が悪しき者と真の友となることも、さらに、善き人が善き人と友にならずにいることも、けっしてゆるさないのだから」と述べているが、ここでの、運命のさだめ、とは何を意味するのであろうか、不明である。プラトンは、かれの論理的展開以前のものな前提を暗黙においてるのであろうか。

<sup>101</sup> 前掲書『パイドロス』255B (80ページ9から11行目)。

<sup>102</sup> 前掲書『パイドロス』255B (80ページ11から13行目)。

<sup>103</sup> 前掲書『パイドロス』255C から D (81ページ2から6行目)。

<sup>104</sup> 前掲書『パイドロス』255D (81ページ12から13行目)。

<sup>105</sup> 前掲書『パイドロス』255D (81ページ13から14行目)。

らだに触れ、くちづけをし、ともに寝ようという欲望を感じる』<sup>106</sup>と二人が自然に求め合うようになると説かれている。そして、床を共にしているとき、恋している人の放縦さと愛人の方の放縦さによって、二人は、愛欲を達成し、多くの人たちから幸福と思われる生活を送るであろう。その二人は「互に愛情によって結ばれた友なのであって、恋のつづく間も、恋がさめてのちも、その親しいあいだがらのままで生を送るのである』<sup>107</sup>とプラトンは言う。そして、二人は最も大きな愛情の保証を互に取り交わしたのだと思い、それを破って憎しみ合う間柄になることは、相互に許されないと確信している。「その生涯を終えるにあたっては、翼なしに、しかし翼を生じようとする衝動をもちながら、肉体をはなれて行く』<sup>108</sup>ので、プラトンは「恋の狂気の褒賞」は小さいものではないと言う。というのは、天界においては「暗い世界におもむいて、地の下の旅路に行くのではなく、明るい生を送り、手に手をとって道を行きつつ幸多き時をすごすこと、そして時きたれば、恋の力によって、相ともに翼が生ずることなのだから』<sup>109</sup>とプラトンは恋の輝かしい様子を力説している。

### 第3節 話法と作文法：すなわち弁論術<sup>110</sup>

『パイドロス』におけるもう一つのプラトンの狙いは、美を素材にして、話し方の技術（言論の技術）ならびに文書の作成の技術について対話することにあつたと思われる。プラトンは、ソクラテスの名を冠して、恋する人を愛することと、恋していない人を愛すること、のいずれも愛で有り得るが、プラトンは、恋する人を愛することの方に神々しいさがあるとし、こちらの愛を讃美している。それに対して、パイドロスが紹介したりュシアスの方は、「国家において最も有力で最も権威をもった人たちが、自分がソフィストと呼ばれはしないかと後世の思わくを気にして、文を書いたり自分の書きものを後にのこしたりするのを恥じる』<sup>111</sup>

<sup>106</sup> 前掲書『パイドロス』255E（82ページ1から2行目）。

<sup>107</sup> 前掲書『パイドロス』256D（83ページ14から15行目）。

<sup>108</sup> 前掲書『パイドロス』256D（83ページ17から84ページ1行目）。

<sup>109</sup> 前掲書『パイドロス』256D（84ページ4から5行目）。この二人の生活は、魂の欲望的部分が完全に支配されたものではない。プラトンは、前掲書『パイドロス』256B（82ページ14から83ページ5行目）において、精神のより優れた部分（理性）が欲望的部分を完全に制御するならば、「この世において彼らが送る生は、幸福な、調和にみちたものとなる」と、というのは、「善き力が生ずる部分はこれを自由にのぼしてやることによって、自己自身の支配者となり、端正な人間となっているからだ」と説明している。プラトンの言う（本稿第1節1.2参照）、節度ある馬（右の馬）が放縦な馬（左の馬）を抑えるところによって、秩序があり、知を愛し求める生活をするが、逆に、放縦な馬が力をあわせて愛欲を達成すると説いている。プラトンは、愛の情念によって相互に恋に陥った二人の生にも、幾つかの段階があること、すなわち魂の理性的部分と欲望的部分のせめぎあいによって異なることを示している。欲望的部分がしのびこむ愛の情念の導き生活は、名誉を求める生活とプラトンは言っている（前掲書『パイドロス』256C（83ページ7から11行目）参照）。

<sup>110</sup> 弁論術は、はじめ、法廷弁論術としておこり、その後、法廷用、議会用、そして儀式用に分かれていった。

とあって、ソクラテスに対する反論を書かないであろうとパイドロス（すなわちプラトン）は彼の立場を思い計って発言するが、しかし、ソクラテスは、政治家について、「政治家のなかで最も気位の高い連中というものは、文を書いたり、書きものをのこしたりすることが最も好きな人たちである」<sup>112</sup>と述べる。政治家は、自身の文書を賞讃する人々を歓迎し、その文書を賞讃する人々の名を冒頭にあげることから判断して、リュシアスがソクラテス（すなわちプラトン）に反論を書かないことへの不満を表明している。さらに、政治家という者は、政務審議会や民会で議決される文案を作成することに携わるから、政治家は、明らかに、「そういった仕事を軽蔑しているのではなく、心から讃美している」<sup>113</sup>と言い、弁論家であるリュシアスが反論しないことに疑問と不満を感じていた。

プラトンは、文書を書くことや話を作ることは恥ずべきことではないが、むしろ「その話し方や書き方が上手ではなく、恥ずべき拙劣な仕方でも話したり書いたりすること、このことにしてはじめて、恥ずべきこととなる」<sup>114</sup>と言う。プラトンは、どのようにすれば上手く話せるのか、また上手く文書を作れるのかについて考察することに筆を進める。プラトンは、リュシアスの書いた文書や、政治的文書、個人的文書あるいは詩人の韻文さらに資料などの散文について、吟味することを試みる。

### 3.1 話法と真実在：大衆への迎合を否定

ものごとを上手く語るためには、はじめに、話そうとする事柄についての真実を知ることがプラトンの基本姿勢である。パイドロスの言葉に代表されるが、その当時には、弁論家が上手く語る人と思われており、弁論家は「ほんとうの意味での正しい事柄ではなく、群衆に—かれらこそ裁き手となるべき人々なのですが—その群衆の心に正しいと思われる可能性のある事柄」<sup>115</sup>を学ぶ必要がある、とパイドロスは語る。すなわち、本当に善いことではなく、本当に美しいことではなく、「ただそう思われるであろうような事柄を学ばなければならぬ。なぜなら、説得するということは、この、人々になるほどと思われるような事柄を用いてこそ、できることなのであって、真実が説得を可能にするわけではないから」<sup>116</sup>とパイドロスに語らせている。だが、この方法はプラトンの基本姿勢とはまったくことなる。然るに、プラトンは、このパイドロスの見解には否定的であり、反対である。プラトンは、

<sup>111</sup> 前掲書『パイドロス』257D (86ページ16から87ページ1行目)。

<sup>112</sup> 前掲書『パイドロス』257E (87ページ4から5行目)。

<sup>113</sup> 前掲書『パイドロス』258B (88ページ9から10行目)。

<sup>114</sup> 前掲書『パイドロス』258D (89ページ9から10行目)。

<sup>115</sup> 前掲書『パイドロス』260A (93ページ3から5行目)。

<sup>116</sup> 前掲書『パイドロス』260A (93ページ6から8行目)。

古代ギリシヤの賢者の言葉を通じて、パイドロスの見解、すなわち当時の一般的な弁論術を否定する立場から分析する。

ここでは、言論の技術（弁論術）を心得ている人は、真実を知った後において、言論の技術を把握しなければならないと想定し、そして、この前提のもと、プラトンは、知識を愛し求めなければ、話す力を十分に持った者には決してなることはできないことを証明する。プラトンは、弁論術は「言論による一種の魂の誘導」<sup>117</sup>であると切り出す。プラトンは、裁判に用いる弁論も議会で用いる弁論ならびに私的に用いる弁論も「同じ技術であることにはかわりはなく」<sup>118</sup>、「同じ程度に尊重されるべきもの」<sup>119</sup>と捉えている。プラトンは、ソフィストの代表的人物の一人として今日知られているゴルギアス<sup>120</sup>や、トラシマコス<sup>121</sup>あるいはテオドロス<sup>122</sup>の言論の技術よりは、ゼノン<sup>123</sup>の言論の技術<sup>124</sup>を想定して、同じ事柄において

<sup>117</sup> 前掲書『パイドロス』260A（96ページ9から10行目）。

<sup>118</sup> 前掲書『パイドロス』260B（96ページ12行目）。

<sup>119</sup> 前掲書『パイドロス』260B（96ページ13から14行目）。

<sup>120</sup> ゴルギアス（Γοργίας, Gorgias.）（前487年生-前376年没）は、レオンティノイ（レンティーニ）（シケリア島東岸の植民市）の出身の人であり、弁論家あるいはソフィストの代表的人物であった。彼の文体は、技巧的であり、名文として知られている。数々の文章上のテクニックスを発明し、一世を風靡した。また、彼は、ペロポネス戦争中427年にレオンティノイの使節の主席代表としてアテナイに来る。

プラトン著（加来彰俊訳）『ゴルギアス』に、ソクラテスとゴルギアスの間での対話が書かれているが、ゴルギアスは、自身のことを弁論家といい、また弁論家とは、弁論の技術を心得ている人と説明し、さらに弁論術は、言論を通して目的を達成する技術のことであると言う。さらに、弁論家には、人を説得する能力があると言う。それに対し、ソクラテス（すなわちプラトン）は、説得の対象は何かというと、ゴルギアスは、正しいこと不正なことに関しての説得であると答える。ソクラテス（プラトン）は弁論術を「迎合」の仕事と規定している。弁論術は、「ある事柄の一部門」であって、ゴルギアスとは異なって、技術ではなくて、それは経験と熟練にすぎないと言う。また、ソクラテス（プラトン）は、弁論術とは、「政治術の一部門の影のようなものである」と言う（前掲書『ゴルギアス』463D（58ページ12行目））。ソクラテス（プラトン）は、ソフィストの術も経験や熟練である、と言っている。

<sup>121</sup> トラシマコス（Θρασύμαχος, Thrasýmachos）（前459年頃生-前400年頃没）は、黒海のボルボロス海峡に臨む都市カルケドンの出身であった。リュシアス（前458年-前378年）と同時代人であった。彼の著作や思想については不明である。弁論術発達の歴史において、その最初の時代を飾った重要な人物であったと考えられる。

プラトン著（藤原令夫訳）『国家（上）』338C（第1巻第12章、55ページ10行目）において、トラシマコスは「〈正しいこと〉とは、強い者の利益にはかならない」と言っている。また、「支配階級というものは、それぞれの自分の利益に合わせて法律を制定する。たとえば、民主制の場合ならば民衆中心の法律を制定し、僭主独裁制の場合ならば独裁僭主中心の法律を制定し、そのたの政治形態の場合もこれと同様である」、そして、彼は「法律を制定したうえで、この、自分たちの利益になることこそ被支配者たちにとって〈正しいこと〉なのだと言ひ、これを踏みはずした者を法律違反者、不正な犯罪人として懲罰する」と述べている人物である（前掲書『国家（上）』338E（第1巻第12章、56ページ13から57ページ2行目）参照）。

またプラトンは、『パイドロス』261C（97ページ7行目）、266CからD（111ページ15行目）などにおいて、トラシマコスを弁論家として取り上げているが、プラトンは彼の弁論術には批判的である。プラトンは自身の言論の技術をトラシマコスが援用することを勧めている。

<sup>122</sup> テオドロス（Θεόδωρος, Theodōros）（?）は、ビザンティオンの出身であり、トラシマコスと共に、弁論

全く正反対のことを主張する技術は「法廷や議会演説の場合だけにかぎられるものでなく」<sup>125</sup>、「ひとが言葉を使うすべての場合に適用されるような何か一つの技術—いやしくもそれが技術であるとすれば—であるといえよう」<sup>126</sup>と説明している。法廷における原告側と被告側において、同じ事柄について正反対なことを主張することが可能になるのは、同じ事柄に対して双方が類似点を見出し、そこから紛らわしいことを暴くことができるからなのであろう。同じことから、あるいはよく似ていることから異なったことを引き出すとき、「人をごまかして、自分のほうはごまかされないようにしようするなら」<sup>127</sup>、その「あるものとあるものとの間の、似ている点と似ていない点とを正確に知っていなければならない」<sup>128</sup>とプラトンは述べ、さらに「知らないものと少し似ているとか、ひじょうによく似ているとかいうようなこと」<sup>129</sup>を識別するには、「ひとつひとつのものの真実」<sup>130</sup>を知ることが必要である。「事柄が互いにどこかに似ているから」<sup>131</sup>、人がごまかされ、事実を反することを考える羽目になる。逆に、ものともとのが似ている点を利用して、「相手の心を事物の真相からそらし、実際と反対のことを思うように少しずつ導いていくこと、あるいは、自分がそういう目にあわないうように避けること、そのどちらでもよいが、もし人がひとつひとつのものの本質が何であるかをちゃんと知っていないとしたら」<sup>132</sup>、その人は巧みな技術家になれないであろう、とプ

---

術発達の歴史において、その最初の時代を飾った重要な人物であったと考えられる。彼は、弁論の語り手でなく、弁論術の教師として優れていた。弁論の語り手としては、彼の性格の冷静さが禍して、見劣りがしたと伝えられている。プラトンの『パイドロス』261C (97 ページ7行目) に彼の名前がトラシユマコスに並べて挙げられている。『パイドロス』266E (13 ページ3から4行目) において、プラトンは、「たしか「保証」と「続・保証」というものを、あの言論づくりの巨匠、ビザンティオンの男があげていたと思う」としてビザンティオンのテオドロスを書いている。

<sup>125</sup> ゼノン (Ζήνων, Zeno) (前490年頃-前430年頃) は、エレアのゼノン (或いはエレアのパラメデセス) と呼ばれる。南イタリアのエレアの人であった。ゼノンは、師パルメニデスの哲学の基本命題である、「存在は一である」を擁護する。プラトンは、「似ていてしかも似ていないようにみえたり」「一つのものであってしかも多くのものであるようにみえたり」「とどまっているものでもあり動いているものでもあるようにみえる」とゼノンの話術を説明している (前掲書『パイドロス』261D (98 ページ7から11行目) 参照)。

またアリストテレスは、ゼノンを問答法の創始者としている。彼の『ソフィスト』において。

<sup>126</sup> 前掲書『パイドロス』261D (98 ページ8から11行目) において、ゼノンの言論の技術をプラトンは「同じものが、似ていてしかも似ていないようにみえたり、一つのものであってしかも多くのものであるようにみえたり、さらにはまた、とどまっているものでもありうごいているものでもあるようにみえること」として紹介している。

<sup>127</sup> 前掲書『パイドロス』261E (98 ページ13から14行目)。

<sup>128</sup> 前掲書『パイドロス』261E (98 ページ14から16行目)。

<sup>129</sup> 前掲書『パイドロス』262A (99 ページ11から12行目)。

<sup>130</sup> 前掲書『パイドロス』262A (99 ページ12から13行目)。

<sup>131</sup> 前掲書『パイドロス』262A (99 ページ16から17行目)。

<sup>132</sup> 前掲書『パイドロス』262A (99 ページ15行目)。

<sup>133</sup> 前掲書『パイドロス』262B (100 ページ3行目)。

<sup>134</sup> 前掲書『パイドロス』262B (100 ページ6から9行目)。

ラトンは説いている。

プラトンは、言論の技術の上達には、真実<sup>133</sup>を知ることが必要であり、「相手がどう考えるかということのほうばかり追求」<sup>134</sup>する技術は、「技術としての資格がないものとなる」<sup>135</sup>と裁断する。他人の思いを気に掛け過ぎることは、プラトンの言う「迎合」あるいは「おべっか」あるいは、エラスムスの言うところの「阿諛・追従」に至り、真実を見誤るであろう。

### 3.2 言論術の構築：総合と分割の事例としてのエロス

プラトンは、弁論術を追求しようとするものにあっては、一定の見解を持ち得ない用語や言葉に関しては、その用語や言葉に様々の異なった意味をあてがうことが可能になる。このことを避けるためには、第一に、一定の方法でいろいろな場合を区別し、第二に、多くの人々の間で異論の多い種類・事柄と、異論の生じない種類・事柄についての特徴を把握し、そして、第三に、話をしている際に当面する一つ一つが、つまり、実際に取り扱おうとする事柄が、どちらの事柄に属しているかを識別しなければならない<sup>136</sup>。

法廷弁論などの話しを一つの生き物として扱い、その話には、頭と脚（或いは尻尾）があるはずであるから、弁論などの話し全体が、頭と胴体と脚と尻尾が相互に関連していることが必要である。

それを二つの手続きを踏んで物語を組み立てていることをプラトンは考案する。その一つが総合することであり、他が分割することである。前者は、「多様に散らばっているものを綜観して、これをただ一つの本質的な相へまとめること」<sup>137</sup>であるが、このことによって、説明しようと思うものを「ひとつひとつ定義して、そのものを明白にするのに役立つ」<sup>138</sup>と説明している。後者は「さまざまな種類に分割することができるということ」<sup>139</sup>である。それは、恋（エロス）を二つに分割したことを意味する。

ソクラテス（すなわちプラトン）によって語られたエロスについての二つの話しにおいて、上で説明した二つの手続きとしての綜観と分割の意味とそれらの関係を明らかにしてみよう。その二つの話しでは、はじめにエロス（恋）とは何かを定義したが、これを定義するときに総合という方法がとられている。恋を精神的な無分別をして二つに分割した。一種の心

<sup>133</sup> この真実とは、真の真実（真実そのもの）であろう。これは、言論の技術のばあいにも、何々のアイデアを知ることの重要性をプラトンは説いている。

<sup>134</sup> 前掲書『パイドロス』262C（100ページ12から13行目）。

<sup>135</sup> 前掲書『パイドロス』262C（100ページ14行目）。

<sup>136</sup> 前掲書『パイドロス』263BからC（103ページ513から行目）参照。

<sup>137</sup> 前掲書『パイドロス』265D（110ページ1から2行目）。

<sup>138</sup> 前掲書『パイドロス』265D（110ページ2から3行目）。エロスとして定義しよう。

<sup>139</sup> 前掲書『パイドロス』265E（110ページ9行目）。



の錯乱として見立てて、恋というものを、快樂への欲望が正しいことに向かう理性によって導かれる心の分別に打ち勝ったこと<sup>140</sup>として規定する。

盲目的な欲望が美の快樂へと進み、肉体の美しさを目指し、指導権を握り勝利することによって、その勢いが強められることが恋と呼ばれる<sup>141</sup>ものである、とプラトンは説明している。ここで、分割という方法によって、「精神の無分別」<sup>142</sup>すなわち快樂への欲望を「一つの共通な種類のもの」<sup>143</sup>と把握した。次に、その分割として「一対の同名の部分が自然に分かれているように、心の錯乱というものもまたわれわれの中にある本来一つの種類のものと考え」<sup>144</sup>、すなわち狂気を考える。その上で、狂気を二つに分割し、左側の（その人が狂っていると見做す）狂気と右側の（神憑りの）狂気を導き出す。さらに、その左側の狂気は、さらに幾つかに分割され、そのように分割されたものの中の一つが禍の恋であり、後者の狂気から、神にゆかりのある恋が見出された。

### 3.3 言論の技術、当時の弁論術ならびにその批判：総合と分割の観点を踏まえて

プラトンは、総合と分割という方法を、彼の言論の技術であるとし、その方法を「ディアレクティケー」<sup>145</sup>（哲学的問答法）と命名している。この真実在（真の言論の技術としてのイデア）を開明しようとする哲学的問答法は、当時流行っていた弁論術とは異なったものであった。当時流行っていた弁論術を法廷弁論の進め方を例にして紹介すると、その弁論の手順は、序論（前置き）、陳述（事実を述べること）、証拠（証人や証拠の提示）、証明（証拠や証人に基づき、自己の主張の正当性を証す）、蓋然性（一般的な蓋然性の主張）、保証（自分の主張

<sup>140</sup> 理性が盲目的な欲望に打ち勝つことを節制といい、盲目的な欲望が節制に打ち勝つとき、恋となる。恋は一種の放縦である。

<sup>141</sup> 前掲書『パイドロス』238B から C（37 ページ 2 から 7 行目）参照。

<sup>142</sup> 前掲書『パイドロス』266A（110 ページ 12 行目）。

<sup>143</sup> 前掲書『パイドロス』266A（110 ページ 12 から 13 行目）。

<sup>144</sup> 前掲書『パイドロス』266A（14 から 15 行目）。心の錯乱とは、狂気のことである。

<sup>145</sup> 前掲書『パイドロス』266B（111 ページ 12 行目）。プラトン（藤沢令夫訳）の『国家（下）』532A から B（第 7 巻第 13 章、158 ページ 4 から 11 行目）において、ディアレクティケー（哲学的問答）について「ひとが哲学的な対話・問答によって、いかなる感覚にも頼ることなく、ただ言論（理）を用いて、まさにそれぞれであるところのものへと前進しようとして、最後にまさに〈善〉であるところのものそれ自体を、知性的思惟のはたらきだけによって直接把握するまで退転することがないならば、そのときひとは、思惟される世界（可知界）の究極に至ることになる。それは、先の場合にわれわれの比喩で語られた人が、目に見える世界（可視界）の究極に至るのに対応する」と説明している。すなわち、真実在は思惟によって知られるものであるが、ディアレクティケー（哲学的問答法）はその実在に開明しようとして魂を導いて行く方法である、とプラトンは意味している。プラトンは、この方法を「肉体のうちなる最も明確な部分（目）が、目にみえる物的な世界のうちなる最も輝かしいもの（太陽）を観るところまで、導いて行くのと同じ」ようであると説明している（上掲書『国家（下）』532D（第 7 巻第 13 章、159 ページ 7 から 9 行目））。

に念を押す)、反駁(相手の反論・反証など)の順になっていた。このことは、『テクネー』(技術)と呼ばれる教科書で一般に流布していた<sup>146</sup>。当時の弁論術(言論の技術)は、形式を重要視していたかのようにプラトンは説明している。それは真実在を明らかにしていないとプラトンは考えていたのであろう。

プラトンは、当時の弁論術を取り上げている。「ほのめかし法」と「婉曲賞讃法」を最初に発見した人としてエウエノス<sup>147</sup>を引き合いに出している。プラトンは、「なにしろこの男は知恵があるからね!」<sup>148</sup>と皮肉っている。テイシアス<sup>149</sup>やゴルギアスについて「真実らしき

<sup>146</sup> ソクラテスとパイドロスの問答でも、『テクネー』の内容と思われる項目を引き合いに出して、両者で話しが展開されている(前掲書『パイドロス』266Eから267A(112ページ13から113ページ7行目)参照)。

<sup>147</sup> エウエノス(Εὐήνος, Eueños)(?)は、アッティカの東南方の海上、小アジアとの中間ぐらにあるパロス島出身であった。彼は、ソフィストであった。プラトン著(田中美知太郎・池田美恵共訳)『ソクラテスの弁明』20BからC(15ページ4から6行目)に、彼は「エウエノスというのだ、ソクラテス、パロスの者で、報酬は五ムナーだ、と言った」として登場している。エウエノスが、一国の市民としてもつべき徳を知っていて、金銭をとって人間教育をしているソフィストとして登場させている。前掲書『パイドロス』267A(113ページ7から10行目)において、「世にもすぐれた人物、パロスのエウエノスにほくたちは御登場ねがわないのか。「ほのめかし法」と「婉曲賞讃法」を発見した最初の人なのだが。ある人々の説によると、彼は「あてこすり法」についてもまた、記憶の便をはかってその覚え歌を作ったそうだ。なにしろこの男は知恵があるからね」と登場させている。プラトンは皮肉っているような気がする。

ほのめかし法も婉曲賞讃法も、この用語から推測するに、明確に表現しない、あるいは真実を曖昧にする、と解釈される言論の技術であると思われる。

<sup>148</sup> 前掲書『パイドロス』267A(113ページ10行目)。

<sup>149</sup> テイシアス(Τεισίας, Teisias)(前480年頃生-?)はシケリア(シチリア)島のシュラクサイの人であった。彼の師コラクスと共に弁論術の創始者と考えられ、弁論術の大御所であった。なお、アリストテレスは、『ソフィスト』において、弁論術の創始者はエンペドクレスであると述べている。

前掲書『パイドロス』273D(130ページ13から131ページ11行目)において、テイシアスに語りかけるように、「真実への類似性を最もよく発見することのできるの、いつの場合でも、真実そのものを知っている者なのだということを、ついさっきわしく論じたところなのです」と問いかけ、言論の技術について反論があるなら反論せよ、もし反論がなければプラトンの論議に従うことをもともとめて、テイシアスに迫っている。プラトンは彼の理論を、「自分の聴衆となるべき人々のさまざまな性質を数え上げて分類すること、それから、事物を種類ごとに分割するとともに、個々のひとつひとつのものについて、これを一つの本質的な相によって包括する能力をやしなうこと、これだけのことをしないかぎりには、話すことに関して人間に可能なかぎりの技術をみにつけるといことは、けっしてできないだろう」と厳しく求めている。さらに、プラトンは、「これらの能力を獲得するということは、なみなみならぬ労苦をばらうのでなければ、とてもできるものではありません、分別ある人はそれだけの苦勞をばらう目的を、人間相手の話や行為におくべきではなく、すべてについてできるかぎり、神々のみこころにかなうことを語り、神々のみこころにかなう仕方では振舞うようになることに、おかねければなりません」と問い説得しようとしている。

プラトンは、上掲書『パイドロス』273BからC(129ページ)において、テイシアスの論法を法廷訴訟弁論として例示し、言論の技術における蓋然性の使い方について言及している。非力だけど勇気のある男が、強力だけで臆病な男を殴り、上衣を奪い、法廷に連れ出され、その訴訟での被告側と原告側の答弁で、「どちらの男も、ほんとうにあったことを語ってはならない」と訴えることとして、テイシアスの言論技術の秘訣を説明している。非力な男は、「どうしてまた、ごらんのようなこの私が、このような男に手出しをすることができましようか」という蓋然性の秘訣を使用する。同様に、臆病な男は何か別の嘘を考え出し、相手

ものが真実そのものより尊重されるべきであることを見ぬいた人たち<sup>150</sup>と紹介し、さらに「言葉の力によって、小さい事柄が大きく、大きな事柄が小さくみえるようにするし、さらには目新しい事柄をむかしふうに、古くさい事柄を目新しく語るし、またあらゆる主題について、言葉を簡単に切ったり、いくらでも長くしたりすることを発明したのだ<sup>151</sup>と述べている。プラトンは、プロディコス<sup>152</sup>については、弁論術が必要にする話し方を「発見したのは自分ひとりだけだ、それは長くてもいけない、ちょうどよくなければならない<sup>153</sup>と語った人として紹介している。プロディコスと同意見のソフィストとしてヒピアス<sup>154</sup>を紹介して

に反駁する。

プラトンは、テイシアスの言論の技術を上のように例証している。プラトンは、嘘を真実のように思わせる・見せる技術が、ソフィストの術であると見ているのであろう。

<sup>150</sup> 前掲書『パイドロス』267A (113ページ11から12行目)。

<sup>151</sup> 前掲書『パイドロス』267AからB (113ページ12から15行目)。

<sup>152</sup> プロディコスは、アッティカ州の東南海上のケオス島(現在のケア島)のイウリスの出身で、弁論家というよりはソフィストとして聞こえた人であった。ゴルギアス(前500/484年-前391/375年)とほぼ同時代に活躍したソフィストであった。ケオス島の外交使節としてアテナイに来て、その傍らで、私的な講演を行って金銭を得ていた。

プラトンの『ソクラテースの弁明』19E (14ページ3行目)において、プロディコスを、ギリギアスならびにヒピアスと並べて、人間教育をして金銭を受け取っている人物として説明されている。また『プロタゴラス』(337AからC) (89ページ4から90ページ6行目)において、プロディコスは言葉の使い方に厳格である点が示されている。例えば、公平な聞き手であるが平等な聞き手であってはいけない、討論と口論の違いとか、喜びと楽しみの違いが説かれている。また上掲書『プロタゴラス』358A (151ページ9から12行目)において、「ここにおいでのプロディコスがするような、いろいろの名称を区別して使うことは、どうかかんべんしてください。あなたのお使いになる言葉が『快』であれ、『楽』であれ、『悦』であれ、あるいはこういった事柄をどこからどんなふうと呼ぶのがお気に召すにせよ、どうかすぐれたプロディコス、ただ私の意図だけを汲んで答えてくださいませんか」とプラトンによって彼の厳格さの一端が紹介されている。

また、(藤沢令夫訳)『メノン』75E (27ページ14行目)でも言葉の使用の厳格さとの関連で彼の名前を挙げている。また上掲書『メノン』96D (105ページ2から3行目)において、「君はゴルギアス、僕はプロディコスから、あまり十分に教育されてなかったのだろう」とソクラテースに言わせている。これは、ソクラテースがプロディコスの弟子であった、あるいはプロディコスから教育を受けたことを述べていることになる。さらに『ラケス』197d (72ページ12から13行目)において、「そのプロディコスこそは、ソフィストのなかでもそうした用語を分類することにかけてはもっともたくみであるように思われるからです」と紹介している。ここで、分類(あるいは分割)とプラトンの言論の技術(総合と分割)に影響したと考えることもできる。『エウテッデモス』(277E)では、名辞の正しい使用や、類似語の区別にやかましい人として取り上げられていると解説書では言われている。

<sup>153</sup> 前掲書『パイドロス』267B (113ページ17から114ページ1行目)。

<sup>154</sup> ヒピアス(ヒッピアス)(Ἰππίας, Hippias) (前460/440年頃生で、前390年頃には没していたと思われる)は、ペロポネス半島の北西部に位するエリス(オリンピアの聖地があるところ)の出身のソフィストであった。詩や散文の文章、リズムや文字の正確などに関して博識を誇り、記憶術に秀でていたと言われている。前掲書『ソクラテースの弁明』19E (14ページ3行目)に、ゴルギアスならプロディコスとともに、人間教育しているソフィスト3人の一人として紹介されている。また、前掲書『プロタゴラス』318E (36ページ10から12行目)において、彼の多方面の才能(算術、天文学、幾何学、音楽など)が示唆されている。彼

いる。ポロス<sup>155</sup>については、彼の弁論術として「重言法」とか「格言的話法」とか「譬喩的話法」を取り上げている<sup>156</sup>。プロタゴラス<sup>157</sup>については、「正語法」弁論術を取り上げ、「老年や貧困に言及して憐れみの涙をよぶ話術」にかけては、ほくのみるところでは、あのカルケドン

は、『ピピアス（大）』『ピピアス（小）』の主要な登場人物である。彼の性格や人物像はこの対話編を参照。

<sup>155</sup> ポロス（Φόλος, Pholos）（不詳）は、シケリア島の南岸アクラガスの出身で、ゴリギアスの弟子であった。ゴリギアスの文書上の技巧を継承し、美文調の文章を得意とした。前掲書『ゴルギアス』461B から 481A（51 ページ 13 から 113 ページ 17 行目）において、ソクラテスと対話している。ポロスは、ゴルギアスの弁証論に関する見解を継承し、弁論術には独裁者の如く人の生き方に影響を与えるほどであり、立派なものであるというが、ソクラテスは弁証論を迎合（おべっか）であるという。ここでは、弁論術が技術であるか否か、迎合（おべっか）であるかどうか、ならびに弁論術の効用について討論されている。プラトンは、弁論術は魂に働きかける政治術であるべきであると言う。

ポロスの「重言法」（対句を用いた構文や、類似音の語を積み重ねていく表現法）、「格言的話法」（格言を真似た話法）ならびに「譬喩的話法」（比喩を使用した表現）が『パイドロス』で述べられている。

<sup>156</sup> 前掲書『パイドロス』267C（114 ページ 6 から 7 行目）参照。

<sup>157</sup> プロタゴラス（Πρωταγόρας, Protagoras）（前 490 年頃生-前 420 年頃没）は、トラキアの南海岸の都市アブデラの出身のソフィストとして知られている。またソフィスト中でも最もよく知られた人物でもある。レトリックの面では、正確を旨とする率直な文体を特徴とする。ゴルギアスなどのシケリア派の技巧的、装飾的名文とは違っていた。言葉の使い方に厳格で、名詞の性の規定や、文章の疑問文、希望文、命令文、応答文の区分など、文法に関する仕事をした最初の人と言われている。前掲書『メノン』91D から E（87 ページ 8 から 11 行目）において、プラトン（ソクラテス）は、ソフィストが人から委ねられたことをしないだけでなく、逆にその人を駄目にしてしまうと言い、さらに、公然と謝金の支払を要求すると言う。プラトンは、プロタゴラスにつて、『メノン』91D から E（87 ページ 13 から 88 ページ 11 行目）において、「プロタゴラスがこの知恵をもとにして一人でかせいだ金額は、名作をのこしてあれほど有名なペイディアスをはじめ、そのほかの十大彫刻家をしのいでいるくらいなのだ」、また「プロタゴラスのほうはどうかといえば、自分と交わるものたちを墮落させ、引き受けたときよりも悪い人間にしてか返すということを四〇年以上もつづけながら、全ギリシアがそれに気づかなかった」と言うが、プロタゴラスは 70 歳近くで死んでいたもので、40 年の歳月をソフィストとして名声を博したことになる。プラトンは、同書 92A（88 ページ 12 から 89 ページ 3 行目）において、「プロタゴラスだけではなく」、「彼より先の時代に生きた者や、現在まだ生きている者でそういう人たちがずいぶんいるのだ」と言い、彼らが「みずからそれを知りつつ青年たちを欺き、害毒をあたえているのだと主張すべきなのだろうか。それとも、そうした実態は彼ら自身にも、気づかれずにいるのだと言うべきだろうか？そして、しばしば人間のうちに最高の知者と呼ばれる彼らのことを、それほどまでに気が狂っていると考えべきなのだろうか」とプラトンはプロタゴラスを含めたソフィストに対する疑問あるいは不信感を表明している。

プラトンは、（藤原令夫訳）『プロタゴラス』において、ソフィストとは何ものであるのか、ソフィストは魂をどのように見ているのか、あるいは捉えているのか、また善く生きるといことを教えることができるかどうかをプラトンはプロタゴラスに問いかける対話形式で明らかにしようとしている。プラトンは、ソフィストから人々は「本職の師匠になる目的で、専門的技術として学んだのではなく、一個の素人としての自由人が学ぶにふさわしいものとして、一般的教養のために学ぶ」と言う（上掲書『プロタゴラス』312B（18 ページ 8 から 10 行目））。プラトンは、ソフィストは「言論に秀でた者に知識を持っている者」と考えている（同書 312D（20 ページ 7 から 8 行目））。何についての言論かという、明確には規定できないが、ソフィストは、「もろもろの学識」を売る商人のようであるが、医術の専門家とは違う。だから、彼らの中には、その学識（知識）のなかで「どれが魂に有益であり、有害であるかを、知りもしないような連中もい

人の力量には誰もかなわないだろうね<sup>158</sup>と紹介し、他方、「大ぜいの人の怒りをかきたてること、そして怒らせておいてもう一度、呪文でもかけるようにして魅惑することの達人でもある—自称するところによればね。さらに、どこからでも理由をみつけてきて、人を攻撃したり、攻撃された中傷を反駁したりすることにかけても、彼の右に出る者はない<sup>159</sup>と述べている。

プラトンは、当時流行っていた弁論術を、「技術にはいる前に予備的に学んでおかなければならない事柄<sup>160</sup>」であって、「弁論術そのものを発見した<sup>161</sup>」ことにはならない、と当時の弁論術の未熟さを指摘している。プラトンは、ソフィスト達の弁論術について、「そういう連中は、この予備的な事柄を他の人々に教えれば、それで自分たちは弁論術をすっかり完全に教えてしまったことになる」と信じていて、それらのひとつひとつを応用して説得力をもった話をすることや、全体を構成することはといえば、それはとるにたらぬ仕事で、彼らの弟子たち自身が、話をするときに自分の力で身につけるべきだと思っている<sup>162</sup>と当時の弁論術の不完全さを指摘し、その弁論術を内在的に批判している。

### 3.4 弁論家になるための条件

弁論家になるための条件を、プラトンは、二つあげている。第一に、弁論家になるための素質があること、第二に、知識と鍛錬を積むことをあげている。次に、プラトンは、弁論術の検討に進んでいる。取り扱う対象の本性、つまり言論の技術（弁論術）の場合には、魂の本性を分析することを要するという。これは、「弁論術とは、魂に言論と、法にかなった訓育とをあたえて、相手の中にこちらのぞむような確信と徳性とを授ける仕事である<sup>163</sup>」ので、弁論術の仕事をするためには、「魂の本性を、分析しなければならない<sup>164</sup>」とプラトンは言う。

---

るかも知れない」ので、知識をソフィストから買う際には、害悪をもたらす知識を買う可能性があると言う（同書 313D から 314B (23 ページ 1 から 24 ページ 11 行目) 参照)。

<sup>158</sup> 前掲書『パイドロス』267C (114 ページ 11 から 12 行目)。ここでカルケドン人とは、トラシユマコスを指している。

<sup>159</sup> 前掲書『パイドロス』267D (114 ページ 13 から 16 行目)。

<sup>160</sup> 前掲書『パイドロス』269B (119 ページ 6 行目)。

<sup>161</sup> 前掲書『パイドロス』269B (119 ページ 7 行目)。

<sup>162</sup> 前掲書『パイドロス』269B から C (119 ページ 7 から 11 行目)。

<sup>163</sup> 前掲書『パイドロス』270B (121 ページ 10 から 12 行目)。

<sup>164</sup> 前掲書『パイドロス』270B (121 ページ 14 行目)。より詳細には、前掲書『パイドロス』269E から 270A (120 ページ 9 から 17 行目)において、「ものの本性についての、空論にちかひまでの詳細な議論と、現実遊離と言われるくらいの高遠な思索とを、とくに必要とする。そういう技術の特色をなすあの高邁な精神と、あらゆる面において目的をなしとげずにはおこなぬ力の源泉」であろうとプラトンは考えている。その一人として、プラトンはペリクレスを紹介している。プラトンは、彼のすぐれた天分に加えて、「彼が、同じこの精神と力量の所有者であるアナクサゴラスに出あったおかげであろう。すなわち、彼はこの人から高遠な

というのは、弁論術を教えるときには、「弁論が適用されるべき対象の本性がいかなるものであるかを、正確に教え示すべきである」<sup>165</sup>とプラトンが考えているからである。その対象とは「魂にはかならない」<sup>166</sup>と言う。よって、弁論術を授けようとするならば、プラトンは、第一に、魂が「一つの相似た性格のものしかないのか、それとも、からだのの恰好と同じように、多くの種類があるのかを、できるだけ正確に叙述し、教え示す」<sup>167</sup>こと、第二に、魂とは「何によってどのような作用をあたえ、あるいは何からどのような作用を受けるものかということ、書いたり教えたりする」<sup>168</sup>こと、第三に、「さまざまな話し方の種類と魂の種類、ならびに、それらのさまざまな反応の仕方を分類整理した上で、その原因をくわしく論じる」<sup>169</sup>ことが必要であると言う。

話し方についてであるが、プラトンは、言論の機能が「魂を説得によって導くことになるのだから、弁論術を身につけようとする者は、魂にどれだけ種類の型があるかを、かならずしらなければならない」<sup>170</sup>と考えているので、「魂にはこれこれだけの種類の型があり、こういう性質とこういう性質があつて、そのことから、ある人々はこのような性質の人間となり、他の人々はこのような性質の人間となっている」<sup>171</sup>と分析する。一方では、「話にはこれこれだけの種類のものがあつて、その各々はこのような性質のものである」<sup>172</sup>と分析する。このような性質の人々は、このような事柄に対して、こういう性質の話によってこれこれの理由によって説得し易く、また、これに対して、こういう性質の人々には、これこれの理由によって説得し難い<sup>173</sup>という風に話の種類と魂の種類とを対応させる。

その次には、実際の生活の中に適用することになる。「どのような性質の者がどのような性質の話によって説得されるかということ、じゅうぶんに言えるようになり、さらに実地においても、身近かに現われる人の性質を見分けて」<sup>174</sup>、どの様な時に語り、どの様な時に控

---

思索をじゅうぶんに吹きこまれ、アナクサゴラスが論じるどころ多かつた知性（ヌース）と無知との本体をつきとめた上で、そこから言論の技術にあてはまるものを引き出して、この技術に役立てた」と理解している（前掲書『パイドロス』270A（121ページ1から5行目））。プラトンは、ペリクレスが弁論術において、だれにもひけをとらない完成の域に達したのは当然であると考えている（前掲書『パイドロス』269E（120ページ11から12行目）参照）。

<sup>165</sup> 前掲書『パイドロス』270E（123ページ8行目）。

<sup>166</sup> 前掲書『パイドロス』270E（123ページ9行目）。

<sup>167</sup> 前掲書『パイドロス』271A（123ページ16から124ページ1行目）。

<sup>168</sup> 前掲書『パイドロス』27A（124ページ5から6行目）。

<sup>169</sup> 前掲書『パイドロス』271B（124ページ8から9行目）。

<sup>170</sup> 前掲書『パイドロス』271CからD（125ページ9から11行目）。

<sup>171</sup> 前掲書『パイドロス』271D（125ページ11から13行目）。

<sup>172</sup> 前掲書『パイドロス』271D（125ページ14から15行目）。

<sup>173</sup> 前掲書『パイドロス』271D（125ページ15から17行目）。

<sup>174</sup> 前掲書『パイドロス』272A（126ページ5から7行目）。

えるか、さらに話し方の種類のそれぞれについて、それらを使うべき好機と使ってはならない時期を識別し得たときに、その人の技術は完全に仕上げられたものとなる<sup>175</sup>、とプラトンは主張する。

#### 第4節 ものを書くことの意味と書かれた言葉：プラトンの見解

##### 4.1 プラトンの問いとエジプトの神アンモンの予言

プラトンは「ものを書くこととはどのような条件のもとにおいてりっぱなことだといえるのか、またどのような条件のもとでは立派でないということになるのか」<sup>176</sup>と問う。プラトンは、ソクラテスが聞いた話としてのエジプト物語を引いて、文字の発明、すなわち書かれた言葉がいかなる影響を人々に与えたかを紹介している。

その文字を発明した神テトウが、「私の発見したのは、記憶と知恵の秘訣なのです」<sup>177</sup>と王様の神タモス（ギリシヤ人達はこの神をアンモンと呼んでいた）に言うと、それに対して、王様の神タモスは、「いまあなたは、文字の生みの親として、愛情にほだされ、文字が実際にもっている効能と正反対のことを言われた」<sup>178</sup>と返答し、その理由としてその王様の神は「人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人々の魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから」<sup>179</sup>と説明し、さらに、「彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである」<sup>180</sup>と返答した。そして、「あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ」<sup>181</sup>と神テトウの発言に答え、「あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない」<sup>182</sup>と返答する。知恵がないのに知恵があるように振る舞うために、文字の発明によって、彼らは、「親しく教えをうけなくてももの知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いにくい人間となるであろう」<sup>183</sup>とその王様の神は予言

<sup>175</sup> 前掲書『パイドロス』272A (126ページ10から15行目) 参照。

<sup>176</sup> 前掲書『パイドロス』274B (132ページ14から133ページ1行目)。

<sup>177</sup> 前掲書『パイドロス』274E (134ページ9行目)。

<sup>178</sup> 前掲書『パイドロス』275A (134ページ13から14行目)。

<sup>179</sup> 前掲書『パイドロス』275A (134ページ15から16行目)。

<sup>180</sup> 前掲書『パイドロス』275A (134ページ16から135ページ1行目)。

<sup>181</sup> 前掲書『パイドロス』275A (135ページ1から2行目)。

<sup>182</sup> 前掲書『パイドロス』275A (135ページ2から3行目)。

<sup>183</sup> 前掲書『パイドロス』275A から B (135ページ4から7行目)。

した。

プラトンは、文字の発明の影響に関して、書いたものに頼るようになるので、人々の記憶力が減退し、文字は想起のきっかけを与えるが、見せかけの知恵を生み出すに過ぎないと位置づけている。これをアンモン神の予言として紹介している。文字の発見は、想起を促すが、記憶は減退させるとプラトンは見ている。

#### 4.2 書き言葉についてのプラトンの見解

上で紹介したアンモン神の予言を受けて、プラトンは、弁論術を書き残したと思っている人達、ならびに書かれたものの中から確実に明晰なものを掘み出せると信じ、その技術を受け取ろうとしている人々については、「たいへんなお人よしであり、まさにアンモンの予言を知らざる者であるといえよう」<sup>184</sup>と悲嘆し揶揄している。というのは、書かれた言葉は、書物に取り扱われる事柄についての知識を持っている人にそれを思い出させる役割をするだけであるから<sup>185</sup>、とプラトンは考えている。

それでは、書かれた言葉の特性はなにであろうか、プラトンの見解を見てみよう。

プラトンは、書かれた言葉の第一の特徴として、書かれた言葉は何かを語っているように見えるが、いざそこで言われていることについて問うても、書かれた言葉はそれには沈黙し答えないと言う。その第二として、「ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適当な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひは話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているといことができない」<sup>186</sup>と書かれた言葉の負の効果を説明している。結局、プラトンにとって、書かれた言葉は「ものをしてしている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉」<sup>187</sup>の「影であると言ってしかるべき」<sup>188</sup>ものに過ぎないのである。プラトンは、「魂の中に知識とともに書きこまれた言葉」<sup>189</sup>に価値を置き、そして、確実に求めている

<sup>184</sup> 前掲書『パイドロス』275D（136ページ4から5行目）。

<sup>185</sup> 前掲書『パイドロス』275D（136ページ5から7行目）参照。

<sup>186</sup> 前掲書『パイドロス』275EからE（136ページ15から137ページ2行目）。

<sup>187</sup> 前掲書『パイドロス』276A（137ページ15から16行目）。

<sup>188</sup> 前掲書『パイドロス』276A（137ページ16行目）。

<sup>189</sup> 前掲書『パイドロス』276A（137ページ12行目）。プラトンは、この言葉を「自分をまもるだけの力をもち、他方、語るべき人々には語り、黙すべき人々には口をつぐむすべを知っているような言葉」と説明している（前掲書『パイドロス』276A（137ページ12から14行目）参照）。またその言葉は、「自分自身のみならず、これを植えつけた人も助けるだけの力をもった言葉であり、また、実をむすばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新たなる心の中に生れ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そしてこのような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力によってかちうるのである」と説明している（前掲書『パイドロス』



るのは真実の言葉である。プラトンの真の言葉のアイデアと比較すると、書かれた言葉はその影に過ぎないと言う。また、プラトンは、書くということは、物事を探究する人の「覚え書きをたくわえる」<sup>190</sup> ことであり、また書かれた言葉の中には、その主題にかかわらず、かならず「慰みの要素が含まれていて」<sup>191</sup>、韻文、散文であろうとも、「真剣な熱意に値するものとして、話が書かれたということは、いついかなるときにもけっしてない」<sup>192</sup> と述べる。さらには、口で話す言葉とても、吟誦される話のように、「吟味も説明もなく、ただ説得を目的に語られる」<sup>193</sup> 場合には、多分に慰みであって、真剣な熱意に値しないと言う。

書かれた言葉についてのプラトンの結論は、「書かれた言葉の中で最もすぐれたものでさえ、実際のところは、ものを知っている人々に想起の便をはかるという役目を果たすだけのものである」<sup>194</sup> とエジプトの王の神アンモンの言に同じである。プラトンによると、書かれた言葉には熱意がなく、空虚であり、精々知識を想起させる力があるに過ぎないということになる。

それでは、プラトンはどのような言葉を信頼に値する言葉としているのであろうか。プラトンは、「正しきもの、美しきもの、善きものについての教えの言葉、学びのために語られる言葉、魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉、ただそういう言葉の中のみ、明瞭で、完全で、真剣な熱意に値するものがある」<sup>195</sup> と力強く主張している。さらに、そのような言葉が、第一に、「自分自身の中に見出され内在する場合」<sup>196</sup>、次に、何かその子供とも兄弟とも言えるような言葉が、この血筋に背かぬ仕方、「ほかの人々の魂の中に生まれる場合」<sup>197</sup> にこそ、自分が生み出した正嫡の子と呼ぶべきであると考え、「それ以外の言葉にかかずらうのを止める人」<sup>198</sup> こそが共にありたい人である、とプラトンは言う。

プラトンは、哲学者に真実在をもとめる知的な活動を求めようとしている。しかし、実際の哲学者には世の人たちからの痛烈な批判が浴びせられている。このことをプラトンは知りながらも、哲学者に真実在を求める知的働きを求め、そのもの（真実）に至ることを期待している。

---

277A (140 ページ 1 から 5 行目)。

<sup>190</sup> 前掲書『パイドロス』276D (139 ページ 6 行目)。

<sup>191</sup> 前掲書『パイドロス』277E (142 ページ 14 行目)。

<sup>192</sup> 前掲書『パイドロス』277E (142 ページ 14 から 15 行目)。

<sup>193</sup> 前掲書『パイドロス』278A (142 ページ 16 から 17 行目)。

<sup>194</sup> 前掲書『パイドロス』278A (142 ページ 17 から 143 ページ 1 行目)。

<sup>195</sup> 前掲書『パイドロス』128A (143 ページ 2 から 4 行目)。

<sup>196</sup> 前掲書『パイドロス』278B (143 ページ 5 行目)。

<sup>197</sup> 前掲書『パイドロス』278B (143 ページ 6 行目)。

<sup>198</sup> 前掲書『パイドロス』278B (143 ページ 7 から 8 行目)。

### 4.3 哲学者とは

プラトンは、真実とはいかなるものかを知り、「自分の書いた事柄について訊問されたときに、書いたものをたすけてやることができ、そして、書かれたものは価値の少なくないものだということを、みずから実際に語る言葉そのものによって証明するだけの力をもっている」<sup>199</sup> 人を知者、あるいは「愛知者」（哲学者）と説明している。書き物からつけられる肩書きで呼ばれてはならず、その呼び名は「真剣に目的をもって当る仕事からこそつけられるべきである」<sup>200</sup> とプラトンは言う。それに対して、書き上げた「当の作品以上に価値のあるものを自己の中にもっていないような人」<sup>201</sup> を「詩人」とか、「作文家」とか、「法律起草家」と呼ぶ。プラトンは、ホメロスやソロンを「愛知者」とみているのであろうか。

プラトンは、「哲学者とは、つねに恒常不変のあり方を保つものに触れることのできる人々のことであり、他方、そうすることができずに、さまざまに流転する雑多な事物のなかにさまよう人々は哲学者ではない」<sup>202</sup> と哲学者の特性を述べている。プラトンは、哲学者たちの自然的素質として、「生成と消滅によって動揺することなくつねに確固としてあるところの、かの真実在を開示してくれるような学問に対して、つねに積極的な情熱をもつ」<sup>203</sup> ことを挙げている。また、哲学者達は、偽りがなく、すなわち虚偽を憎み、真実を愛することを挙げている。人間の欲望は、魂がそれ自身だけで楽しく快樂にかかわることになるが、だが「肉体的な快樂については、その流れは涸れることになるであろう」<sup>204</sup> と言っている。また哲学者は「節度ある人間であって、けっして金銭を愛し求める人間ではないだろう。なぜなら、余人はいざ知らずそのような人だけは、人々が熱心にお金を求め散財することによって獲得しようとするさまざまなものに対して、まったく関心がないはずだから」<sup>205</sup> とも言っている。これに加えて、プラトンは哲学者にとって必要不可欠な自然的な素質についても言及している。プラトンは、

- (1) 万有の全体を一神的なもの人間的なもの一つねに憧れ求めよとする程の魂、よってけちな根性（狭量な精神）とは相容れない精神

<sup>199</sup> 前掲書『パイドロス』278C（144ページ5から7行目）。

<sup>200</sup> 前掲書『パイドロス』278D（144ページ7から8行目）。

<sup>201</sup> 前掲書『パイドロス』278D（144ページ17行目）。

<sup>202</sup> プラトン著（藤原令夫訳）『国家（下）』484B（18ページ12から14行目）。

<sup>203</sup> 前掲書『国家（下）』485B（第6巻第2章、21ページ8から10行目）。

<sup>204</sup> 前掲書『国家（下）』485E（第6巻第2章、23ページ14から15ページ）。人の様々な欲望が、「ある一つの方向にはげしく向かっていくときには、それ以外の方向への欲望は勢いが弱まるもの」とプラトンは想定している（上掲書『国家（下）』485E（第6巻第2章、23ページ3から5行目）。魂が学ぶことやそれに類する事柄へ向かって流れるときには、肉体的な快樂への流れの勢いが弱まる。

<sup>205</sup> 前掲書『国家（下）』485E（第6巻第2章、24ページ2から5行目）。

- (2) 死を恐ろしいものとは考えない
- (3) 公正にして穏和な魂<sup>206</sup>
- (4) 記憶力のよい魂<sup>207</sup>
- (5) 生まれつき度を守り優雅さをそなえた精神<sup>208</sup>

などを取り上げ、哲学は「生来の自然的素質において記憶力がよく、ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、真理と正義と勇氣と節制とを愛し、それらと同族の者でないかぎり、けっしてじゅうぶんに修めることのできないような仕事なのだ」<sup>209</sup>と整理している。

プラトンは、哲学者が国家の支配者になるときに来るまでは、国は禍から解放されないと考えている。上で示した自然的素質を持つ人たちが国家の支配者になることによって、国家の秩序が保たれ、人々は幸福な状態になり、それを維持できるのであろうか。

しかし、現状では、国家を船に譬えれば、舵取りに適していない水夫達が支配権を廻って争っている。現状では、支配する能力を備えた者にその舵取りを任せるべきであるのに、そのようにはなっていない。プラトンは、「現在実際の国の政治に当たっている支配者たちはといえば、これは、いまわれわれが語った水夫たちに譬えれば間違いではないだろうし、また、彼らから役立たずと呼ばれ『星を見つめる男』と呼ばれている人々は、真の舵取り人になぞらえれば間違いはないだろう」<sup>210</sup>と現状認識をしめし、現状では、プラトンが主張するところの哲学者たちが国の支配者にはなっていないとの認識を持っていたのである。

確かに、哲学者と自称している人たちには、役立たずという批判にはプラトンは賛成している。自称哲学者が全くの「碌でなしであり、役立たずの人間」であることは真実であるとプラトンは認めている。プラトンは、自称哲学者が非難され、中傷されることを真摯に受け止めて、何故、彼らが劣悪な人間であるのか、何故役立たずの人間であるのか、真の哲学者とは何かを示すことによって、現実の哲学者に対する非難・中傷を解決し、その上で支配者たちとして哲学者が適していることを導き出そうとしている。

そのために手がけることは、「哲学的素質を真似し装って、その仕事のなかに居座っている者たちを観察しなければならぬ」と言っている。そのことが、『パイドロス』において、プラトンが試みたソフィストあるいは弁論家への批判であった。

<sup>206</sup> これは、交わりがたく粗暴な魂とは相容れない。

<sup>207</sup> これは、忘れっぽい魂とは相容れない。「忘れっぽい魂は、哲学をする資格をじゅうぶんにもった者のうちに数へ入れないことにしよう」と言う（前掲書『国家（下）』486D（第6巻第2章、26ページ14から15行目））。

<sup>208</sup> 「そのような精神は、もって生まれた素質におのずから促されて、真実在の実相へと容易に導かれる」と言う（前掲書『国家（下）』486E（第6巻第2章、27ページ8から9行目））。

<sup>209</sup> 前掲書『国家（下）』487A（第6巻第2章、28ページ2から5行目）。

<sup>210</sup> 前掲書『国家（下）』489C（第6巻第3章、35ページ2から5行目）。

魂の不滅性・不死性を説いている、彼の中期対話編『パイドン』において、プラトンは哲学のもたらす解放と浄化に反することなく哲学に励み、その導くままに歩むよう<sup>211</sup>にと学を愛する人々に投げかけている。プラトンは、事物を考察する際にしつこく膠着する肉体および肉体的欲望から浄化され解かれた状態で真實在に至ることを説き、そしてプラトンは魂の目で事物を考察し哲学に励むことを期待し、「哲学は肉眼による考察も、耳その他の感覚による考察も、すべて偽りにみちたものであることを示して、どうしてもそれら感覚を使わなければならないとき以外は、それらから離れているように説得する。そして魂が自分自身に集中し、沈潜して、自分自身以外の何ものをも信頼せず、純粹に自分自身で純粹な『ものそのもの』を直観したときにだけこれを信じて、これに反してさまざまな事物の中であって異なった形をとるものを自分以外のものを用いて考察する場合には、そのような対象を決して真実なものとしてはならない、そのようなものは感覚的な可視的なものであり、それに対し、魂が自分だけで見るものは叡知的な不可視的なものなのだと教えてくれる」と説いている（前掲書『パイドン』83A（160ページ16から161ページ5行目））。その上で、「真の哲学者たちは、すべての肉体的欲望から離れ、かたく身を守って、それらの欲望のおもむくままにならない」<sup>212</sup>とプラトンは説いている。

### むすびにかえて

プラトンが対話編『パイドロス』において明らかにしたことは、次の引用文で語られるであろう。すなわち、話しや書くことについての善し悪しについて、「リュシ阿斯でもほかの誰でもいいが、一個人としてもを書く場合にせよ、あるいは、法律の制定者として政治的な文書を書くというやり方で、公の立場でものをかくにせよ、いやしくもかつてものを書いたり、ないしはこれから書こうとするに際して、もし書かれた文字の中に何か高度の确实性と明瞭性が存すると考えてそうするのであれば、その場合にこそ、人が実際に非難を口にするとしないとにかかわらず、書く本人にとって恥ずべきことなのである。なぜならば、正と不正について、善と悪について、覚めて見るその真実のすがたと夢の中の影像との区別をしらないということは、たとい群衆こぞってこれをほめ讃えようとも、真理の名において非難さ

<sup>211</sup> 例えば、前掲書『パイドン』82D（160ページ3から5行目）において、「彼らは、自分たちがどこへ行くのかわかっていないような人々とは行をともしせず、みずからは、哲学に、哲学の与える解放と浄化に、反すること話すべきではないという信念のもとに、哲学に従い、哲学のみちびくままに進んでゆくのだ」とプラトンは哲学を勧めている。

<sup>212</sup> 前掲書『パイドン』82C（159ページ14から15行目）。これは、「財を愛する多くの人々のように財産をなくして貧乏することを恐れるからではない。また彼らは権力や名誉を愛する人々のように悪しき生活にとりまとう不名誉や不評判を恐れるゆえに、それから離れているのでもない」とプラトンは説明している（前掲書『パイドン』82C（159ページ15から17行目））。

れることをけっしてまぬかれるわけには行かないのである」<sup>213</sup>とプラトンは彼の結論を述べている。プラトンは、自称哲学者が真理（真実在）に至ろうとするのではなく、群衆が求めるものを引き出すことを目的にするソフィストや弁論家に批判の刃を向けている。また、プラトンは、現実の哲学者（自称哲学者）たちが哲学者としての自然的素養をそこなっているが故に、非難・中傷され、役立たずと罵られる。その原因は不適切な彼らソフィストたちの教育にあるとプラトンは考えていると思われる。ソフィストの劣悪な教育を自然的素質に恵まれた魂が受けると、その魂は最悪の状態に陥るとプラトンは判断している。そのような教育がソフィストによって、若者達の自然的素養に恵まれた魂に教育し、「一部の若者たちがソフィストたちから害悪を受けている」<sup>214</sup>、さらに「ソフィストたちが個人的な教育を通じて害悪を与えている」<sup>215</sup>とプラトンは確信している。

その故に、プラトンは彼の対話編において、ソクラテスを主役にして、魂とは何か、徳とは何か、正義とは何か、さらに美とは何か、と真実在を模索する。その一方で、ソフィストあるいは弁論家達の若者達に向けられていた教育の現状を認識し、それを批判的に評価し、それを批判する行動に出ている。プラトンは、ソフィストを「相手が若者であれ、もっと年取った人々であれ、男であれ女であれ、最も効果的に教育をほどこし、自分たちの思いどおりの人間に仕上げている」<sup>216</sup>と認識している。その教育が与えられる対象は大衆であり、「何らかの公に催される多数者の集会」<sup>217</sup>において、「言われたり行なわれたりすることを、あるいは賞讃し、あるいは非難する」<sup>218</sup>とプラトンはその現状を観察している。この中で教育された若者達は、大衆・群衆が美しいと言い張るものをそのまま美しいと主張し、醜いと主張するものをそのまま醜いと主張し、ソフィストが行うことを自分の仕事とするようになる。そのようにしてソフィストと同じような人間が再生されるとプラトンは認識している。

プラトンは、ソフィストの一人一人の実際の教育内容といえば「大衆自身の集合に際して形づくられる多数者の通念以外の何ものでもなく、それが、このソフィストたちが『知恵』と称するところのものにはかならない」<sup>219</sup>と批判的である。そのソフィスト達には「何が〈美〉であり何が〈醜〉であるか、何が〈善〉であり〈悪〉であるか、何が〈正〉であり〈不正〉であるかについて、真実には何ひとつ知りもせずに」<sup>220</sup>とその教育内容・方法に不満をも

<sup>213</sup> 前掲書『パイドロス』277D から E (142 ページ 3 から 11 行目)。

<sup>214</sup> 前掲書『国家 (下)』492A (第 6 巻第 6 章, 43 ページ 1 から 2 行目)。

<sup>215</sup> 前掲書『国家 (下)』492A (第 6 巻第 6 章, 43 ページ 2 から 3 行目) 参照。

<sup>216</sup> 前掲書『国家 (下)』492B (第 6 巻第 6 章, 43 ページ 4 から 6 行目)。

<sup>217</sup> 前掲書『国家 (下)』492B (第 6 巻第 6 章, 43 ページ 9 行目)。ここで、公の場所とは、国民議会、法廷、劇場、陣営などである。

<sup>218</sup> 前掲書『国家 (下)』492B (第 6 巻第 6 章, 43 ページ 10 から 11 行目)。

<sup>219</sup> 前掲書『国家 (下)』493A (第 6 巻第 7 章, 46 ページ 4 から 5 行目)。

ち、非難するのである。ソフィストは、大衆が「喜ぶものを『善いもの』と呼び」<sup>221</sup>、大衆が「嫌うものを『悪いもの』と呼んで」<sup>222</sup>、それらについての根拠を示していないので、便宜上（必要）やむを得ざるものを「『正しい事柄』と呼び、『美しい事柄』と呼んでいるだけのことであって」<sup>223</sup>、「〈必要なもの〉と〈善いもの〉とでは、その本性が真にどれほど異なっているかについては、自分でも見きわめたことがないし、他人にも教え示すことができないのだ」<sup>224</sup>と非難する。確実に、種々雑多な群衆の気質や好みをよく心得ていることをもって、知恵であると言えるであろうか、また、自分の思い・決定を多数者の権威に委ねるのが理に適っているであろうか。その多数者が誉めることが真に善いことであるであろうか、ソフィストがこの点について議論していない。

プラトンは、『パイドロス』において、言論の技術として自身の「ディアレクティケー」（哲学的問答）をソフィストたちや弁論家たちに提示し、真実在を明らかにし、美としてのエロスのもつ特性を明らかにしようとした。単に、世の人たち（大衆）が考える美をもって、美そのものとするのではなく、その本性に立ち戻り、現実の美しい人に、美があるかどうかを明らかにする方法として、彼の哲学的問答法を提示した。

プラトンの認識論についてももう一点言及する必要がある。プラトンは、神あるいはソクラテスの言うデーモンが実在すると前提し、その神あるいはデーモンに真実在があるかのようにイデア論では説明しているが、神の存在あるいはデーモンの介在を認識論は必要とするのであろうか。この問題は、エピクロスの原子説、あるいは、ルクレーティウスの『物の本質について』では知覚することは真実であるとする唯物論とは論争の渦に落ち込むが、ここでは、デカルトの『省察』の一説を引用し、「私」が存在することは明晰判明であれば、神の存在することが否定されないことを示すだけにする。「私が疑うということ、すなわち不完全で依存的なものであるということに私が注意するとき、独立な完全な実有、すなわち神の観念がまったく明晰判明に私に現われる。そしてこのような観念が私のうちにあるということ、すなわちこのような観念をもつ私が存在するというこの一つのことから、神もまた存在するという、そして私の全存在はあらゆる瞬間においてこの神に依存するということを、私はかくも明瞭に結論する」<sup>225</sup>とデカルトは私の存在は神の存在することの証であるとしている。この点はプラトンの無前提に神が存在する（デーモンの介在する）ことを認識論の前提

<sup>220</sup> 前掲書『国家（下）』493B（第6巻第7章、46ページ16から47ページ1行目）。

<sup>221</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ3行目）。

<sup>222</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ3行目）。

<sup>223</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ5行目）。

<sup>224</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ6から7行目）。

<sup>225</sup> デカルト著（梶田啓三郎訳）『省察』省察四（73ページ11から15行目）。

点とは相異している。筆者もデカルトの認識論に与する。しかし、本稿では、エピクロスなどの唯物論との論争の渦には入り込むことはできない。

#### 引用文献

- (1) プラトン著 (藤沢令夫訳) 『パイドロス』岩波文庫, 1974年.
- (2) プラトン著 (田中美知太郎・池田美恵共訳) 『パイドーン』新潮社, 1973年.
- (3) プラトン著 (田中美知太郎・池田美恵共訳) 『ソクラテースの弁明』新潮社, 1973年.
- (4) プラトン著 (藤沢令夫訳) 『国家(上)(下)』岩波文庫, 2009年.
- (5) プラトン著 (藤沢令夫訳) 『メノン』岩波文庫, 2004年.
- (6) プラトン著 (藤原令夫訳) 『プロタゴラス』岩波文庫, 2016年.
- (7) プラトン著 (加来彰俊訳) 『ゴルギアス』岩波文庫, 1980年.
- (8) プラトン著 (三嶋輝夫訳) 『ラケースー勇気について』講談社学術文庫, 2017年.
- (9) デカルト著 (榎田啓三郎訳) 『省察』角川文庫, 1970年.
- (10) プチャー著 (田中秀央・和辻哲郎・寿岳文章共訳) 『ギリシア精神の様相』岩波文庫, 1986年.
- (11) 藤沢令夫著 『プラトンの哲学』岩波新書, 2017年.

#### 参考文献

- (1) アリストテレス著 (戸塚七郎訳) 『弁証論』岩波文庫, 2015年.
- (2) アダム・スミス著 (大内兵衛・松川七郎訳) 『諸国民の富』(四) 岩波文庫, 1992年.
- (3) ヘシオドス著 (廣川洋一訳) 『神統記』岩波文庫, 1984年.
- (4) プラトン著 (久保 勉訳) 『ソクラテースの弁明』岩波文庫, 2018年.
- (5) プラトン著 (三嶋輝夫訳) 『アルキビアデス』講談社学術文庫, 2017年.
- (6) プラトン著 (久保 勉訳) 『饗宴』岩波文庫, 1971年.
- (7) ジョン・ロック著 (加藤 節訳) 『統治二論』(岩波文庫, 2010年)
- (8) マックス・ウェーバー著 (富永祐治・立野保男共訳) 『社会科学方法論』岩波文庫, 1971年.
- (9) マックス・ウェーバー著 (富永祐治・立野保男共訳, 折原 浩補訳) 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫, 2018年.
- (10) 納富信留著 『プラトンとの哲学 対話編をよむ』岩波新書, 2015年.  
(くぼた よしひろ マクロ経済学・金融論)